

大正から昭和になつてから軍縮條約のため、日本海軍は五對三の兵力で米・英兩國に押へられましたので、時の聯合艦隊司令長官加藤寛治大將——第二の東郷さんといはれたあの加藤さんが、日本海軍は今までのやり方ではだめだ、日本の海軍の兵力を押へつけられてゐる以上は、寡をもつて衆を破る命がけの訓練をやる以外にはないと、實戦宛らの血の出るやうな猛訓練をおやりになつたのです。あまり訓練が激しすぎるので、事故も起り犠牲も生じ世間から非難されたのですが、加藤さんは——もうわが海軍は某國と戦争をしてゐるつもりなんだ——とおつしやつて、自分が全責任を負つてゐるから、どんなことがあつても訓練をゆるめるやうなことなく、もつと／＼激烈な計畫をたて、やつて呉れと、艦隊が訓練の合間に入港したとき息抜きのお酒の席にも、加藤さんはその頃艦隊の參謀長の高橋さんによくおつしやつてゐました。高橋さんは日露戦争時代にはたしか中尉で、その頃からさつぱりした肌合ひの誠實なお方でしたが、加藤長官の參謀長時代には、奇略に富んだ智謀家といはれてゐました。そして加藤さんのおつしやる——これからは海軍は軍艦と共に飛行機と潜水艦戰術で進んで肉弾で敵をやつつけねばならぬのだと、高橋さんは艦隊參謀長から初代の航空戰隊司令官におなりになつて、猛訓練をつづけられたのでした。海の荒鷲の第一陣の親鷲は實に高

橋大將(當時少將)で、こゝでも兵力の量の劣勢を力で優勢にと、海上の航空猛訓練を行はれましたのですが、時の航空戰隊旗艦赤城艦長は今の聯合艦隊司令長官山本五十六大將(當時大佐)でいらつしやつたのです。それから加藤さんのおつしやつた一方の潜水艦戰術の方は末次大將(當時少將)がお引き受けになつて、初代の第一潜水戰隊司令官として、みづから潜水艦に乘組み、生命を賭して猛訓練をおやりになつたのでした。また中村大將は、戰術の大家で、他のお方の思ひもつかないやうな奇抜な戰略をお立てになるお方と聞いてゐましたが、とても豪快磊落なお方で、それに非常にお酒がお強く、何處にそんな優れた智謀がおありかと思はれるほどなものでした。この中村さんは加藤さんのよきお酒のお相手であり、加藤さんの片腕となつて、永い間お親交でありました。加藤さんと中村さんは、お年は七つか八つお違ひでしたが、どちらも兵學校も大學校も一番でお卒業のお方と承つてゐます。また中村さんは、すつと獨身で通してをられまして、お榮轉などでお引越のときには格別のお道具もなく、澤山の本ばかりであるといふ、無頓着振りだつたと聞いてゐましたが、四十幾歳におなりになつた艦長のときに、はじめてお美しいお夫人をお迎へになつたとうかゞつて、このばあさんも嬉しくておよろこびを申し上げたことがありました。中村さんは海軍大學校長

として、加藤さんのお意志をくんで、近い将来に對する偉い海軍士官方をお教育になつたさうであります。いづれにしましても加藤さんの三羽鳥といはれました中村、末次、高橋の三人のお方は、みな大將となられ、聯合艦隊司令長官や艦政本部長として、今日の世界無敵の強い強いわが日本海軍の傳統を受けついで、そして更に輝かしいものになさつたお方たちであると思ふのであります。――』

小松刀自の語る『加藤寛治大將の三羽鳥』は日露戦争後一時は中だるみのやうな恰好であつたのを軍縮條約といふ一大試練を機に、臥薪嘗膽の猛訓練をつゞけ、加藤大將の意志を受け継いで、寡をもつて衆を破る『見敵必殺』の帝國海軍の傳統を一層鞏固にした、わが海軍史上劃期的な三提督といふべきであらう。

鐵鯨戰隊の猛訓練

米英脅威の末次戰術

『末次さんは磊落なサツパリしたお氣性の裡にも、几帳面なお方でして、また人情味に富んだお方で、若い海軍士官たちに向つて誰が一番好きですかといふと、末次閣下だといふ返答が口をついて出るといふほどでした。末次さんは古武士のやうな面影のあるお方で、部下のお方たちを非常に愛されまして、ひとたび閣下のもとにお働きになつたお方は、いづれも慈父のやうに敬慕なさつていらつしやいましたものですよ。』

と、小松刀自は語つてゐる。

末次信正大將は、昭和七、八年の所謂非常時に、海上に乗り出して艦隊長官として活躍したのであつた。當時中將だつた末次長官は、その統御の手腕は加藤寛治大將とはまた違つた意味で、部内の信頼の的となつてゐた。

「一九三六年の危機まさに来る——」と、太平洋の波荒き危機を孕んだ當時、その國際危機を控へて、聯合艦隊の指揮權を把る者は末次中將を措いて他にない——といふほどに、全海軍の輿望を擔つて、第二艦隊司令長官から聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官に榮轉したのは、昭和八年十一月であつた。

末次聯合艦隊司令官時代の猛訓練は、加藤寛治大將の同長官時代と好一對の猛訓練であつた。そして實戰舞臺の戰略戰術にかけては第一人者といはれてゐた末次大將の戰術は「末次戰術」の名のもとに、英國や米國の海軍が脅威の對象としてゐたものである。

嘗て大正三年頃、東郷元帥は「日本海軍は飛行機と潜水艦に力を注げば無敵海軍となる。」といつて、將來の日本海軍の方途を示唆したのであるが、加藤寛治大將はこの元帥の意を繼いで、特に航空隊と潜水艦の充實に力を注いだ。それを更に受け繼いで、殊に潜水艦の充實と、實戰舞臺の活躍に、文字通り献身の努力を捧げたのは末次大將であつた。

第一次世界大戰以來、潜水艦は、米・英兩國から人道の仇敵のやうに取扱はれ、軍縮會議の度毎に、これが全廢乃至縮限が叫ばれた。ロンドン會議のときにも、わが潜水艦七萬八千噸を一噸たりとも減らしてはならないといふのが、三大原則の一つであつたが、遂に米・英と同等に五萬二千噸に減らされてしまつた。五・五・三といふ比率は、全く米・英の卑劣な野望の現はれであつて、日本のみ三に仰へつけるといふことは、彼等自體が既に平和を素すものであることを示してゐるのであつた。

世界に誇るわが潜水艦

近代科學の生んだ潜水艦が、他の兵器、武器と區別されて、獨り人道の敵といふ汚名を被せられる理由はない。そして一二の優勢海軍國の利己主義や御都合主義によつて、消滅せしめられやう筈もないのだ。事實、軍縮會議後いくばくもなく、從來潜水艦排斥に腐心してゐた英米

兩國が、最新鋭潜水艦を整備し、大潜水艦勢力を擁してゐるのであつた。

潜水艦はわが日本、佛國、伊太利が優勢を謳はれたものだが、この三國のみの愛好武器ではないので、獨逸潜水艦は復活して愈々異彩を放つてゐた。ソ聯もまた潜水艦の充實に努めるなど、世界各國ともみなこの武器に、それぞれ海上國防の一部を依存してゐるのであつた。

潜水艦は單獨で隱密の裡に敵に肉迫して、その有力な魚雷によつて大主力艦を屠ることが出来るから、艦隊戦闘にも参加し得られるのである。であるから優勢海軍國、殊に進攻作戰を基調とするやうな海軍の最も苦手とするところである。また航續力が大きいので、支援部隊がなくても單獨に遠距離に進出し、邀撃作戰上自由に活躍し得られるのである。それに潜水艦の配備は、戰域、地勢、作戰方針などによつて決定せられ、その隻數も主として自主的に決定せられるので、相手國の潜水艦兵力と相對的に考慮される點が、他の艦種と比較して著しく少いといはれてゐる。

このやうに國防上自主的に必要とする兵力量のことを、潜水艦の自主的所要量といはれてゐる。だから潜水艦の保有量はたとへ他國と均等であつても、その兵力量が國防計畫上の『自主的所要量』に不充分のものだつたら、なんにもならないのだ。日本海軍がロンドン條約におけ

る日、英、米の三國の潜水艦兵力均等に満足しなかつた譯はそこにあるのである。

英、米、ソ、佛、獨、伊の各國海軍とも必死となつて、それ／＼の國防強化の建前から潜水艦の充實に力を入れて來た。わが日本海軍においては、苦心慘愴、優れた技術と精神力をもつて世界に誇る精銳なる潜水艦を建造すると共に、東郷元帥、加藤大將の遺髪を受け繼いで、末次大將をはじめ幾多の潜水艦戰術の權威ある優秀な將士を、訓練育成のため不斷の努力を續けて來たのであつた。

「軍艦平賀」が帝大總長

「軍港横須賀のお出生ではありませんが、少年時代を横須賀ですごし第二の故郷としていらつしやるお方には、造船中將の平賀閣下がいらつしやいますよ。それに海軍のお方ではあり

ませんが音楽家の山田耕筰先生もさうです。平賀閣下も山田先生も、加藤寛治大將や小泉人情大臣と同じやうに、やはり汐入小學校のお出身でいらつしやいますが、あの小學校からは偉いお方がたくさん出てをりますね。』

と小松刀自の語る平賀造船中將は、工學博士、現東京帝大總長である。

今や世界に誇る無敵日本海軍の精銳陸奥、長門の二大戦艦をはじめ航空母艦加賀、赤城、一等巡洋艦妙高級、古鷹級などの建造に當り、常に列強海軍の一步先きを行く日本造船技術の父として『軍艦平賀』の名を世界に響かせた平賀造船中將も、五十年の昔は可憐な小學生として軍港の小學校に通つてゐたのであつた。

平賀中將の半生は海軍日本の造艦史さながらである。同中將は四十年の『建艦報國』の半生を回顧して、

『僕の海軍での最初の仕事は、明治三十六年武藏と八重山が北海道の根室で坐礁したのを救援に行つたときだつた。あまり世間に知られてない經歷だが、今でも軍艦や汽船の救難作業がたいのいの場合勘でやるのに、僕はこのとき科學的といふと可笑しいが飽くまで精密な計算をやつて見事に浮ばせた。この經歷が役立つて三十八年旅順口が陥落したとき沈没した

ロシアの軍艦の引き揚に大いに役立つたものである。大正元年から思ひ出の深い横須賀で、巡洋戦艦比叡や、最初の三萬トン級戦艦山城を近藤造船中將の下で進水主任として建造した。どれもみな心血をそゝいだものだが、やはりいちばん身のはいつたのは陸奥、長門などだが、あのワシントン會議で當時建艦中の世界に類のない精銳な巨艦が建造中止となり、加賀と赤城は航空母艦に變り、天城はあの大震災でこはれてしまつた。大震災で莫大な財力の必要が生じた當時としては、その建造中止も、却つてそれがよかつたともいへるが、造船家としてはまことに心残りであつた。しかしその後建艦費の節約から、僕たち造船家は精魂の限りありとあらゆる技術と苦心を傾倒し、海軍の傳統精神にそふて、世界無比の精銳を設計建造したのであつたが、單に技術だけでは駄目であつて、やはり第一は精神だ。『眞心』のあるところ技術を超越した技術を生み出すと、僕は大學で學生に教へて來たのである。』

母校を思へば童心

日本造艦技術の父平賀中將は、東京帝大の講師として兼任教授として大學でも三十年間に互り、幾多の有爲な後進學徒を指導したが、昭和十三年躍進海軍日本の歴史に巨大な足跡を残し停年を惜まれつゝ東大を去つたのであつた。

『これからは悠々自適しつゝ残る生涯を造艦の研究に盡すのだ。』

といつてゐた平賀中將は、衆望によつて東京帝國大學の總長に推されたのである。

『ぼくたち、わたしたちの學校から、東京帝大の總長が出られた。』

といふので、平賀總長の母校汐入小學校の生徒たちは大いに名譽とし、非常に喜んだ。さつそく六年生の男生と女生の代表者は、お祝ひの文章を書いて送つたのであつた。それに對して平賀總長は、次ぎのやうなお禮狀を寄せたものである。

『お祝ひの言葉を戴いて有難う。皆さん、お國のため健康で勉強して下さい。』

昔の汐入小學校生徒

東京帝國大學總長 平賀 讓

この簡單で思ひやりの深い答詞に同校では大喜びで、母校の名譽として永く保存することにしたのである。

昔の「おいらん船」

軍艦の變遷についても、小松刀自の回想談はなか／＼興味があるのだつた。なにしろ明治の前の幕末時代に、佐賀藩がオランダから買入れた『觀光丸』といふ日本海軍はじめての軍艦といふものから知つてゐるのだから――。

とにかく小栗上野介によつて、横須賀海軍工廠の前身の製鐵所といふものが創立され、外人

技師を招聘して軍艦建造を開始されたが、いづれも帆と蒸気機關の双方を備へて、帆、機双方の操縦によつて航進するといふ文字通り隔世的のものでつた。そして明治十一年頃に、日本製の軍艦として『清輝』がはじめて西洋に回航したのであつたが、艦長は井上良馨元帥の少壯士官時代であつたといふ。

現在、東京灣外浦賀港に繋留されて、少年刑務所として遠洋漁業の母船となつてゐる『武藏』は、同型の『大和』と共に明治中年時代では精銳を誇つた軍艦だつた。千餘噸の木造船で、船體を黒く塗つてあり、船脚はいかにも重さうで、恰も花魁おいらんのはく漆塗りの木履のやうな恰好をしてゐる。それに帆走の装備をしてあるので、帆桁のついた檣が何本も複雑に立つてゐて、これも花魁の簪かんざしや笄こうがいみたいである。それで昔の軍艦を『花魁船』などといつたものである。

世界に誇る巨艦「陸奥」

日清戦争時代の優秀艦にしる、日露戦争で活躍した三笠、朝日、敷島、富士、浅間、出雲、

八雲、日進、春日などの戦艦、巡艦もみんな英、佛、獨、伊で建造されたものである。——それが、幾多の變遷を経て、大正九年五月には、横須賀海軍工廠において、戦艦「陸奥」が晴れの進水をした。

三萬三千噸、速力、裝備とも世界に誇る戦艦陸奥の進水式を拜觀して、『海軍おばあさん』は躍りあがつて喜んだ。

『こんなお目出度い、こんな嬉しいことはありませんよ。長命したお蔭ですよ。日本もこれで大丈夫、御安泰だ。わたしは、いつ死んでも構ひませんよ。』

更に昭和になつてからは、世界各國を驚嘆せしめた精銳、妙高、高雄などの甲巡の出現や、海の荒鷲の母艦龍驤、飛龍、潜水母艦迅鯨、長鯨、大鯨、さては俊敏隼の如き驅逐艦などの次ぎから次ぎの誕生に、彼女はその海軍の精銳が一隻が加はるごとに、自分の可愛い孫が一人づゝ誕生して來るやうに歡喜してゐるのであつた。

四萬噸の巨艦海底へ

苦艱に彩るわが造艦史

海軍おばあさんを驚喜させた巨艦陸奥の誕生までには、わが海軍はもとより日本國民を痛憤させた幾多の犠牲が拂はれたのであつた。それはいはゆるワシントン會議といふ海軍々縮會議である。

話は前に溯るが、日露戦争に大勝したわが帝國海軍の聯合艦隊旗艦三笠をはじめ主力艦は全部外國の建造になるものだつた。それに戦争中に戦艦初瀬、八島の二隻が敵の機雷に觸れて沈没した事件があり、これを契機に軍艦を日本で建造するの必要性はいよいよ切實なものとなつ

て、先づ三笠に代るべき筑波の建造となつた。

なにしろ四千トン位の軍艦しか造つたことのなかつた日本の造船技術家が、一躍約一萬四千トンもある装甲艦を造ることになつたのだから、その苦心も一方でなかつた。筑波は今の言葉でいへば『巡洋戦艦』の先驅である。引きつゞき生駒、伊吹、鞍馬、さては薩摩、安藝などの巨艦が建造されたが、薩摩や鞍馬の進水式のときには、その巨艦が果してうまく進水するかどうかといふことについて、横濱の外人の間で賭けが行はれたなどいふ話が傳はつてゐるほどである。外人はそんな眼でわが造艦力を見てゐた時代であるから、海軍造船技術官の苦心と、完成したときの得意のほどが想像されるのである。

更に巨砲大艦主義を徹底させて河内、攝津の二艦が設計され、次に日本として現代戦艦の時期に第一步を印した記念すべき軍艦が生れた。それは現在も活躍してゐる金剛であつて、砲の大きさからいつても速力からいつても、斷然世界のトップを切つたのであつた。この艦は技術輸入のピリオッドとして英國に注文され、わが海軍多數の技術者が監督官として滞在して建造されたものであつた。

太平洋上に巡戦艦の雄姿

一方にはその金剛と同型の比叡、榛名、霧島が内地で建造されてゐたので、大正四年には同型の最新精鋭巡洋戦艦が、その雄姿を太平洋に浮べることが出来た。また速力はやゝ劣るが砲力において強化された扶桑、山城、伊勢、日向の四艦が大正七年までに竣工し、つゞいて歐洲大戦の實戦の戦訓を取入れて長門、陸奥の兩艦が完成して世界最強のものとして大いに氣を吐いたが、これが即ち八八艦隊といふ戦艦八隻、巡洋戦艦八隻計畫の最初の二艦であつた。

當時、歐米各國は歐洲大戦のあとを受けて、それぞれ大艦を建造してゐたが、遂に大正十年のワシントン會議となつた。同會議は米國大統領の招請により日、英、米、伊、佛の五ヶ國參加の上、華府に開催せられたのであるが、當時は造艦技術上各國は競つて最新鋭艦を建造せんとして、いはゆる建艦競争となり主力艦の如きは四萬トンから五萬トンに及ばうとし、備砲も

巨砲主義を出現しその停止するところを知らないといふ有様で、海軍々縮の氣勢は國際情勢などにより關係國の間に充溢してゐたやうである。

ところでワシントン會議においては、遂にわが日本の戦艦保有量を英米の六割に制限したのである。いや制限といふよりは日本の建艦を禁止して、英米の建造をわが日本の六分の十まで認めしめたのだつた。そして日本の建艦はもちろんのこと、進水日を待つてゐた土佐は廢棄せしめられ、加賀、赤城の兩艦は主要兵装を除いて航空母艦となつたのである。當時すでに竣工してゐた陸奥も廢棄を強ひられたのであつたが、わが日本はこれだけは譲らなかつた。それを口實にして英國は二隻を新造し、米國は建造中の三隻を保有する権利を取ることになつた。

現在でも世界に誇るわが戦艦陸奥の誕生には、かうした経緯があるのだつた。

列強驚嘆の精鋭艦

ワシントン海軍々縮會議につゞいて、ジュネーブ、ロンドンの兩軍縮會議によつて、英米兩

國は自分勝手な主張をなし、わが日本帝國の國防の安全を脅かすやうな情勢に立ち至り、海軍々人はもとより國民は悲憤の血を湧かしたのであつた。小松刀自は往時を追想して言ふ。

『まつたくあんな口惜しいことは、わたしの一生を通じて二度とないことでしたよ。軍縮つて言葉を耳にするとぞつとしたものです。あの軍縮會議といふものも、わたしはよくは存じませんが、最初のヨーロッパ大戰で、イギリスもアメリカも勝つたとはいへ疲れてへとくになつてゐるところへ、日本がますます優勢になつて來て、殊に建艦技術がたいへん進歩して立派な軍艦がどしどし出來て來ますし、世界一の強い海軍であるのでイギリス、アメリカの者どもが猜疑心を起して軍縮會議といふ大芝居を打つたわけなんでせう。あの頃は高雄(先代)、天城、土佐、紀伊、尾張などいづれも世界に類のない精銳だつたが、それがワシントン會議で建造中止となり天城は大震災でこはれ、四萬トンの大艦土佐は惜しくも太平洋の奥深く沈めてしまつたのでした。殊に土佐は廢棄となる運命がわかつてゐながら進水させたのですが、それは死んで行く娘に花嫁衣裳をさせるやうなもの、苦心して設計建造の任に當つた造船官の方々や海軍職工さんの身になつてみたらどんなだつたでせうか。わたしたちさへ口惜し涙が出ましたよ。それに軍艦ばかりではありません。海軍々縮のため

に立派な海軍將士の方が、どしどし現役を去つて豫備役に編入され、まことに惜しいことでしたよ。』

海軍々縮は軍艦ばかりではなく、幾多の前途有爲の將士を豫備役に編入させたことや、優秀な海軍造船、造兵機の職工さんたちを淘汰したことは惜しみてもあまりある痛恨事であつた。しかし『艱難汝を玉にす』の詞の通り、帝國海軍は戦時ばかりでなく平時にも斯うした尊い試練を嘗め、傳統の海軍魂はいよいよ磨かれて光輝を増すばかりであつた。

軍縮條約の廢棄艦

軍艦廢棄を内容とする國際軍縮會議は、ワシントン會議(大正十年十一月—同十一年二月)が最初の會議であつた。このワシントン條約により廢艦第一期作業を完了したのは同十三年二月十六日で、廢艦となつた軍艦は左の十隻であつた。(括弧内は噸數と速力)

◇戦艦肥前（二二、七〇〇トン。速力一八・八節）◇同三笠（一五、二〇〇。一八・六）◇同鹿島（一六、四〇〇。一八・五）◇同香取（一五、九五〇。一八・五）◇同薩摩（一九、三五〇。二〇・五）◇同安藝（一九、七八〇。二〇・三）◇同攝津（二〇、八〇〇。二〇・五）◇巡洋戦艦生駒（一三、七五〇。二一・〇）◇同伊吹（一四、六〇〇。二二・五）◇同鞍馬（一四、六〇〇。二二・五）

右のうち鹿島、香取兩艦はいづれも十二吋砲四、十吋砲四、六吋砲十二門といふ備砲で、薩摩と安藝は十二吋砲四、十吋砲十、六吋砲十二門。攝津は十二吋砲十二門、六吋砲十門といふ備砲であつた。そして三笠は周知の通り装備を解いて、記念艦として保存することになつた。

日露戦争中に前述の如くわが戦艦初瀬、八島の兩艦が旅順口封鎖中に老鐵山沖で敵の機雷に觸れて沈没したのは、大きな痛手であつたが、幸にアルゼンチンから購入した日進、春日（伊太利建造）の兩装甲巡洋艦を代艦として、辛じて主力艦の勢力を維持したのであつた。そして豫て英國に注文してあつた、前記の鹿島、香取が、遂に戦争に間にあはなかつたので、わが海軍では戦艦の設計を企圖し大急ぎで戦艦の建造に着手したのが生駒、筑波の兩艦であつたが、これも戦争には間にあはず明治四十年に進水したのである。

攝津は河内と共に、十二吋砲十二門を搭載の設計で建艦に着手したものであるが、これは日露海戦の教訓に鑑みて、わが海軍では巨砲單一主義を採用した最初のいはゆる『弩級艦』であつて世界造船界をビックリさせたのであつた。ところが英國がこの設計を真似して新型の軍艦建造に着手し、先進國だけに準備もあり金もあるので大急ぎに建造して、攝津や河内よりも一と足お先きに竣工した。それが即ち有名なドレッドノートだ。斯うして英國は弩級船を最初に建造したが、わが海軍の造船技術はこの頃から漸く本格的となり、大小の艦艇や兵器も内地でどしどし製造し世界各國に優秀な技術を誇るやうになつたのである。

海軍建設史上の尊い犠牲

このやうな由緒のある攝津、生駒は兩艦とも廢棄の運命となつたが、その兩艦のそれ／＼の姉妹艦であつた筑波、河内の兩艦が共に平時爆沈したことは遺憾であり、また何等かの因縁と

いふやうなものを考へさせられる。即ち生駒の姉妹艦筑波は、大正六年一月十四日横須賀軍港に碇泊中、火薬庫の爆發で沈没し百六十名の殉職者を出した。そしてその翌七年七月十二日には、攝津の姉妹艦河内は山口縣徳山沖で、これも火薬庫の爆發で沈没し、六百二十一名の殉職者を出したのであつた。——わが海軍は、その建設以來七十餘年の永い年月に、幾多の戦役事變において、海戦で軍艦を撃沈されたことはないのであつた。これは世界各國にないわが海軍の誇りである。しかし敵國との海戦以外に、沈没した軍艦は相當の數に及んでゐる。殊に平時において、前記の筑波、河内の兩艦をはじめ練習艦隊の松島(明治四十一年)、特務艦志自岐(大正八年)、巡艦新高(同十一年)、工作船關東(同十三年)、水雷艇友鶴(昭和九年)その他潜水艦などの不慮の事件は遺憾のことであつたが、それはみな無敵を誇る現在の日本海軍建設史上の尊い犠牲であつて、殉職將士の英靈に對して、國民は冥福を祈ることを忘れてはならない。

なほ鹿島、香取の兩艦は、御召艦の光榮に浴したり、儀禮艦などに就役した由緒深い軍艦であつたが、不幸にも廢棄處分となり、現在の練習巡洋艦鹿島、香取は二代目を襲名したものである。

軍縮と加藤トリオ

第一次上海事件當時、加藤隆義大將は少將で第一航空戦隊司令官として、彼の空中艦隊を指揮し、ウヰスン砲臺の空中爆撃を敢行して勇名を轟かしたのであつた。その華々しい實戦の體驗をもつて海軍大學校長となり、更に航空本部長に轉じ、波漸く高まらんとする太平洋に備へて海の荒鷲軍の充實に努力邁進したのであつた。

この加藤大將は、わが日本海軍の一大試練であつた軍縮會議から無條約時代への過程に深い因縁があり、その劃期的なわが海軍革新時代の華々しい大舞臺に登場活躍した『加藤トリオ』の一花形である。即ちワシントン會議のときは岳父の加藤友三郎元帥が全權で、加藤寛治大將を首席隨員として出かけ、第二次會議には加藤元帥の甥に當る小林躋造大將(隆義大將の從兄)が海軍首席委員として出かけ、叔父の後始末に盡力し補助艦問題で活躍したのである。隆義大

將はかつては一般軍縮會議の常設諮問委員としてジューネーヴで活躍し、更にロンドン會議當時は加藤寛治軍令部長の下に第一部長として活躍したが、寛治大將がその主張が葬らるゝや軍令部長の要職を一擲し、末次中將も辭職したとき自分もそれに殉じて深く第一部長をやめてしまつたのである。

五・五・三比率で敗北

ワシントン、ロンドン兩會議は、英、米兩國の平和愛好といふ巧みな口車に乗せられて、五・五・三の比率を押しつけられ日本は見事に敗北をした。次いで昭和十年、世界各國の注視のうちにロンドン軍縮豫備交渉がはじまつた。この豫備交渉こそは次期海軍會議の前哨戰で、日本の死命を制する大會議だつた。こんどこそ腰を据えて過去二回の會議外交の失敗を清算して軍備權平等の原則を確立し、國防安全感を獲得せねばならぬのであつた。その帝國不退轉の

最高峰を目ざして、わが海軍は軍令部總長に、伏見元帥宮殿下を奉戴し、わが海軍の陣容まさに完璧にして明朗に結成されたのである。

そのときに當り加藤隆義大將は軍令部次長の要職に就き、且つ軍縮對策委員長として重要な役割を擔ふたのであつたが、ロンドン會議當時はとかく圓滑を缺いた軍令部と海軍省、いはゆる二階と階下の連絡統合が、兵學校では同級で仲よしの長谷川大將が當時海軍次官(大臣は大角大將から永野大將)だつたので加藤、長谷川の名コンビによつて完全に融合されたのであつた。

海軍無條約時代

遂に來るべき日が來た

そして來るべき日が遂に來た——過去十五年間の永きに亙り、わが日本の海軍々備を拘束し

たワシントン、ロンドン兩條約は昭和十一年十二月三十一日をもつて満期失效となり、翌十二年一月一日以後いはゆる無條約時代となつた。一月十五日、わが日本は正式に軍縮會議脱退を世界各國に向つて聲明した。大海軍國であるわが日本が参加してゐないのでは、どんな條約も意義をなさないことは各列強國とも知つてゐる筈だ。しかし英、米、佛、伊、ソ聯などの各國間にいろんな會議が続けられ、條約とか協定などがつゞけられたりしてゐたのである。

自主的の海軍々備

帝國議會では「帝國は不幸にして軍縮會議を脱退したけれども、一日も早く再び新軍縮會議が開催されて、公正妥當なる條約の締結されんことを希ふものである」との主旨を言明した。そして自由無碍の立場になつて、今後は日本の地理的環境によつて國情に即應し、且つわが日本國民性に適合する最も經濟的な、そして效果的な、いはゆる自主的の海軍々備を整備充實し得るやうになつたのであつた。

米國東洋進攻作戰

日本潜艦を恐れての「輪型陣」

無條約海軍時代を迎へると、世界一海軍の整備を目ざす米國が、眞つ先きに非常な馬力で軍備充實に乗り出した。この米國の海軍力整備の目的は、日本のそれとは違つて、東洋における權益と優越感保持のため、五千海里の太平洋を渡つて、東洋に對して作戰せんとするためにあつた。これを米國では渡洋作戰、または東洋進攻作戰といつてゐた。そしてその作戰遂行のため、いはゆる米海軍の「輪型陣」を案出し、これに要する樞軸の主力艦と航空母艦をはじめ各種の軍艦が完成すれば、何時でも東洋攻撃の作戰を敢行し得ると、傲語してゐたのだ。

この輪型陣なるものは、日本の強力な潜水艦を恐れた結果案出されたものであり、更に十六吋砲九門乃至十四吋砲十二門の備砲を搭載した三萬五千トン、速力二十六ノット乃至二十七ノットの主力艦二隻建造、また同年内に十一隻の新艦建造、補助艦建造十年計畫など、みな渡洋陣型完成への歩みを続けやうと畫策したのであつた。

當時の各國の海軍勢力

當時(十二年一月)わが海軍で調査した無條約第一年劈頭における各國現有勢力は、大體次ぎの如くであつた。(單位トン、括弧内は隻數)

既成艦艇 ◇主力艦

日本	二七二、〇七〇	(九)
米國	四六四、三〇〇	(一五)

英國	四七四、七五〇	(一五)
佛國	一三三、一三四	(六)
舊式戰艦	五二、七九一	(三)
伊國	八六、五三二	(四)
獨逸	三〇、〇〇〇	(三)
舊式戰艦	三九、六〇〇	(三)
ソ聯	ナシ	
舊式戰艦	九三、四八〇	(四)

◇航空母艦 (△は軍縮條約規定の航空母艦に該當せざるもの)

日本	六八、三七〇	(四)
	△三一、〇五〇	(三)
米國	九二、〇〇〇	(四)
	△二八、三〇〇	(二)
英國	一一五、三五〇	(六)

伊國	佛國	英國	米國	日本	ソ聯	獨逸	伊國	佛國	英國	米國	日本	◇同
九三、三三三	一一一、二四〇	二一〇、〇六九	二三〇、五一五	一一八、八六九	二七、一八〇	三五、四〇〇	七七、九七四	五八、八二五	一八五、六四〇	七〇、五〇〇	一〇七、二五五	(Bクラス)
(九一)	(七五)	(一七八)	(一九八)	(九七)	(四)	(六)	(一七)	(九)	(三五)	(二〇)	(二二)	

ソ聯	獨逸	伊國	佛國	英國	米國	日本	◇巡洋艦 (Aクラス)	ソ聯	獨逸	伊國	佛國	
七、六〇〇	ナシ	九七、三四二	一〇五、九二三	一八三、三九六	一五一、八〇〇	一〇七、八〇〇	洋艦 (Aクラス)	七、六〇〇	ナシ	△四、八八二	△二〇、〇〇〇	△二一、七〇〇
(二)		(二〇)	(二〇)	(一九)	(二六)	(二二)		(二)		(二)	(二)	(二)

獨逸	一四、九一五	(一九)
ソ聯	約四八、八〇〇	(約四五)
◇潜水艦		
日本	七〇、〇八四	(五五)
米國	七四、四八〇	(八七)
英國	五五、四七四	(五三)
佛國	七八、〇六三	(八三)
伊國	四八、九八七	(六四)
獨逸	六、九二四	(二三)
ソ聯	約八四、三〇〇	(約一二〇)
◇合計		
日本	七四四、四四八	(一九八)
	△三一、〇五〇	(二)
米國	一、〇八三、五九五	(三三〇)

	△二八、三〇〇	(二)
英國	一、二二四、六七九	(三〇六)
	△一一、七〇〇	(二)
佛國	五七二、一二二	(一八七)
	△一〇、〇〇〇	(一)
伊國	四〇四、一六八	(一八六)
	△四、八八二	(一)
獨逸	一二六、八三九	(五四)
ソ聯	約二六八、九六〇	(約一七五)

右のほかに、米國には掃海艇で補助航空母艦として使用のもの十一隻。給油艦、潜水母艦、敷設艦で補助航空母艦たるべきもの五隻あつた。また建造中の艦艇は、日本航空母艦二隻、巡洋艦(Bクラス)四隻、驅逐艦一隻、潜水艦七隻。米國には巡洋艦(Aクラス)二隻、同(Bクラス)七隻。英國巡洋艦(Bクラス)九隻などいふ現有勢力であつた。

山本、大角、飯田の三傑

大正から昭和の各將軍

大正から昭和の初期へかけては、海軍の重鎮として黒井、有馬、野間口、栃内、山屋、村上、山下、鈴木、竹下、財部、小栗、名和、安保各大將などが活躍したのである。殊に艦隊の長官や、鎮守府司令長官を勤めた大將達は、横須賀軍港に在る日が多かったので、小松刀自とは熟知の間柄だった。

元首相の岡田大將、加藤寛治大將や山本英輔大將、大角岑生大將などは海軍部内でも名だ

る左黨であり、鎮守府司令長官だったので、小松に出入の機会も多かったが、いづれも刀自の俠骨と誠實を愛してゐた。

☆

海軍兵學校第二十四期生は、傑物揃ひとして有名なものであつた。なにしろ四十年も昔の卒業者であるから現存將星なども少くなつたが、首席で卒業したのは筑土次郎少將である。筑土少將は、日露戦争には大尉で従軍し、第六戦隊の旗艦須磨の参謀として東郷正路司令官の幕僚で武勳を輝かし、部内での前途を囑望されたものだが、健康上から少將で退き現役以外の海軍將校をもつて組織されてゐる有終會の監事として活躍してゐる。

A組の二番で卒業したのは山本英輔大將、三番は大角岑生大將、B組の一番が飯田延太郎中將である。この三提督は日露戦争にはいづれも大尉で参戦し、殊にあの日本海大海戦には参謀または驅逐艦々長として勇名を轟かしたのであつた。

山本英輔大將は人も知る海軍の大御所だった山本権兵衛伯の愛甥で、聯合艦隊司令長官や横須賀鎮守府司令長官等を歴任し軍事参議官となり、大角大將もまた山本大將と略々同じい経歴を辿つたが、犬養、岡田、齋藤の三内閣に海軍大臣を歴任して令名高く満洲事變の功績によつ

て男爵となられた。飯田中將は第二艦隊司令長官、舞鶴要港司令官等を歴任して豫備役に編入後、十一年三月故人となつた。

この山本、大角、飯田の三提督は、中將まで雁行し、將來わが海軍を背負つて立つ傑物だとして、部外からも注視の的となつてゐたものだが、大正の末期から昭和にかけて事實わが海軍實戦部隊の首脳部となり、殊に山本、大角兩大將については茲に改めて述べるまでもないほどである。

山本 大角、飯田の三提督は、それぞれ特色があつた。山本大將は軍略家として著名であり大角大將は軍政家として令名あり、飯田中將は用兵作戰の權威であつて 剛膽 古武士の面影ありと謳はれたものだ。しかもこの三提督は友誼に厚いこと三人兄弟の觀があつた。

揃ひも揃つて同期の三提督が、識見手腕人格ともに優れ、海軍の巨頭と謳はれてゐた裡面に、これはまた揃ひも揃つて酒豪の聞こえ高いのであつた。由來、海軍部内には酒豪が多いが山本、大角、飯田三提督には酒の上にもそれぞれ變つた特色があるから面白いのだつた。

これは海軍部内で有名な譬へ詞ことばとなつたものであるが、曰く飯田中將は「斗酒なほ辭せず」といふので酒豪に對する最大級の形容詞であると思ふと、これはまた上には上のあるもので、

大角大將は「酒三斗」とある。一斗ばかりではどうにもならぬ、酒三斗とは驚くべき形容であるが、更にまた上があるもので山本大將は「底なし」とは實に驚くに堪へたりではある。

まさか一斗の、三斗の、底なしのと、酒を吞めるわけのものではあるまいが、それぞれ酒の上において、はたまた個性において三提督の異彩ある面目が躍如たるものがあるのだつた。

徹宵大杯を呼んでも士氣に一抹の微動もなく、艦隊の行動作戰など掌を指すが如き剛毅明敏なる飯田提督ではある。紅らむ童顔にみほとけのやうな微笑をたゞへ、相手の何者たるを問はず如何なる難問題も献酬の裡にテキパキと、しかも圓滿に處理解決して行く大角大將ではある。往年、支那に特派されて梟傑張作霖の饗宴攻め外交の重圍に陥り、しかも平然として最後に彼れ張作霖をして大杯の前に屈せしめた山本大將ではある。

この三提督は、海上生活中は揃ひも揃つて小松最良であつた。艦隊の横須賀入港ごとに上陸すると、よく小松を訪れ、

『おばあさん、また來たぞ、厄介になるぞ。』

と、洋上の猛訓練の勞苦をしばし慰めたのであつた。しかもいづれも名だゝる愛酒家だけにその宴席に陶然たるや、末座末席にいたるまで恰も春風の吹く如く、和氣あいあいたるもので

あつた。その間、いさゝかの弛緩とか不體裁といふやうなことは見出し得ない、實に杯を楽しみ、杯に溺れずといふ、典型的な明朗な酒であつた。

海軍おばあさん重態

『海軍おばあさん小松の老女將重態』との報が傳へられた。それは支那事變の勃發の前年、昭和十一年の早春であつた。黒船の浦賀、海軍創始の一世紀近い昔から、病氣らしい病氣をしたことのない小松刀自は、永年健闘の勞苦もつもつて、一度にどつと大患の病床に臥す身となつた。

『死ぬなら小松の家で死にたい。』

彼女は斯ういふて頑張つてゐたが、遂に海軍共済組合病院に入院した。年が年だけに、もう再起は覺束ないといはれてゐた。海軍々醫官も首を傾けて、屢々絶望の報が傳へられて、彼女

を知る多數の人々に一脈の寂しみを投げかけたのであつた。

多くの海軍將星などから懇篤な見舞狀が寄せられた。また各方面から激勵の書面、眞情こめた病體の伺ひ狀などが殺到し、いづれも自分の祖母を案じるやうな懇切なものだつた。

『わたしや、まだ死ねませんよ。もう一度本復して、せめて八十八のお祝ひをして、皆様に立派に御挨拶を述べ、御厚恩に對する御禮を申し述べてから大往生しますよ。』

彼女は病床で、さう言ひつゞけてゐた。——闘病三ヶ月餘、八十八歳の彼女は、軍醫官も『奇蹟的』と驚くほど、ぐんぐん重病を克服して健康をとり戻して行つた。生來負けん氣の彼女は、その不撓不屈の旺盛な精神力で、見事に老病をさへ完全に撃退したのであつた。

退院して歸宅すると、家人の言葉も容れないで、海軍さん達の宴席には姿を現はしてゐた。相手が誰れであらうと、必ず一度は席に出ないと氣が濟まないのだつた。

〇月になると猛訓練を終り、次きの訓練への英氣を養ふため、聯合艦隊の艦艙が舳艙相叩んで横須賀軍港に入港した。

『おばあさん、いま歸りましたよ。』

潮や陽やけのした頼母しい艦隊の將士は、交る／＼小松を訪れた。そして老刀自の健康恢復

を祝福して乾杯し、暫く振りで疊の上で洋上の猛訓練の勞を慰めるのであつた。

——無敵艦隊入港、上陸第一歩の夕べ、わが海軍のおばあさん小松刀自は泣いてゐた。男まさりの彼女、八十八年の永いあいだ女の手一つで礎き上げて來た『小松』の老女將である刀自は、

『ほんとに皆さん御苦勞さまのことです。たのもしい海軍將士のお方たちが、おばあさん達者になつてよかつたと、御親切にいたはつて下さる御親切に、このばあは泣けて泣けて仕方ありませんでした。』
と、海の勇士たちの真心に感激してゐるのだつた。

多難を克服米壽の賀筵

『海軍のおばあさん、山本小松刀自』の米壽の祝ひは、その年の秋五日間にわたり豪華な賀筵

を開催された。

爽涼の氣みなぎる軍港の秋、小松刀自の賀筵は重病克服の全快祝も兼ねて催されたが、同市はしまつて以來の豪華なものといはれた。その祝ひには海軍方面はもとより朝野各方面の諸名士が参列し、あるひは祝辭を贈り、米壽とは思はれない元氣な刀自を中心に、めでためでの長壽祝福の杯を高らかに擧げられた。

小松刀自は赤い式服を身に纏ひ、軍港横須賀市の總鎮守諏訪神社に参拜した。足どりもしつかりと石段を登り、神前に進んだ彼女の双眼には熱涙が溢れてゐた。——海軍の祖母は、八十八歳の高齡を迎へたけふの日を感謝し、いつまでも——神前に額づいてゐるのであつた——。

小松刀自の生家山本家には、長壽の人たちがたくさんあつた。それも女性の方が長壽の系統をひいてゐるのだつた。刀自の祖母は九十九、母は九十七歳まで存命してゐた。また刀自の姉みねさんは二歳年上で、軍港に『小松』と並び稱されてゐる割烹『魚勝』の老女將である。

十六歳の春、江戸小石川の實家を飛び出した昔の悦子の小松刀自は、女性の身で全國屈指の料亭『小松』を礎き上げた。しかしその反面には實家のため、姉弟のためにも努力してゐるのだつた。この方面から見ても、立派な立身傳中の女傑である。

明治維新の劃期的の大變動に際會して、小石川の豪商淺古屋は窮境のどん底に突き落されてしまつた。お出入りの紀州藩は、幕末の變遷で藩籍奉還となり、多くの士分に御用達てゐた所謂御用金は戻るところの騒ぎではなかつた。それに經濟界の大變動から商法の方もうまくゆかず、とやかくしてゐるうちに明治の初年、父と相續人の兄とが相次いでこの世を去つてしまつた。

浦賀の吉川家から横須賀に来て、獨立して『小松』を經營した彼女は、母、姉、弟の三人を迎へて、女の身一つで山本家の大黒柱となつたのだつた。そして海軍の祖母、山本小松刀自の八十八年間の努力は報ひられて、刀自を樞軸として一門一黨みな榮えてゐる。

海軍の長老瓜生大將

「瓜生さんも、とう／＼お亡くなりになりましたか。日露戦争が終つて目出度く凱旋なさつ

たときの若々しいお元氣な、あのお顔がまだ目に残つてゐます……。」

東郷元帥の薨去の後、わが海軍の最長老であつた海軍大將瓜生外吉男の薨去は、同大將よりも年上の小松刀自を寂しがらせたのであつた。——日露戦争の名提督瓜生大將（當時少將）は、支那事變勃發の昭和十二年十一月十一日、湘南小田原で病氣療養中のところ遂に八十一歳の高齡で薨去したのであつた。

日露戦争中を通じて輝かしい幾多の大小の海戦があつた。しかし開戦の發端において、機先を制して一舉敵艦を屠つた仁川沖の海戦こそは、海戦史上に永遠に特筆大書さるべきである。即ち、明治三十七年二月五日、日露の國交斷絶するや同九日の夜、わが瓜生少將司令官の第二艦隊の一隊は旗艦浪速をはじめ淺間、千代田、新高、高千穂、明石の六隻をもつて、宣戰の大詔降下の前日、一舉に仁川港に迫り鎧袖一觸、敵ロシアのワリヤーグ、コレーツの兩艦に猛砲火を浴びせて見事に撃沈し、日露大戦の初陣の血祭りにあげたのであつた。これは今次の東亞大戦争の發端、ハワイ眞珠灣のアメリカ艦隊奇襲戦にも比すべき花々しい緒戦の大捷であつて、仁川沖の快捷の報は當時いかに全國民の血潮を沸かしたものであつたか！

「あ那时的嬉しさは、生涯忘れられません。ロシアといふ大敵を相手にして戦争したら、ど

うなることかと内心ビクついてゐたものでした。それがどうです……いきなり仁川海戦大勝利、ロシア軍艦二隻撃沈の號外が、チリンチリンと鈴音も勇まさしく飛んで来たんですからね。ラジオのない時代ですから新聞の號外が一番のニュースなのです。それも仁川海戦大勝利と幸先きのいゝ號外なので、みんな萬歳々々で躍りあがつて喜びあつて、市中も一時に活氣づいて生き／＼として來ました。わたしは瓜生さんのお寫眞を神棚に祀つておがんでゐるうちに、嬉し涙がこみ上げて來ましたよ。」

小松刀自はつい最近のこのやうに、斯う語つてゐる。

瓜生大將は提督として赫々たる武勳を輝かしたばかりでなく、現役を去つてからも、終始一貫國事に盡瘁した功績は偉大なものであつた。同大將は石川縣の舊大聖寺藩士の家に生れ、明治五年海軍兵學寮（兵學校の前身）に入り、同八年米國に留學し、同十四年海軍中尉に任ぜられ、その間主として運用術と砲術を研究して歸朝。海軍砲術教科書を編纂し、わが海軍砲術界の先驅者として甚大なる貢獻があつた。それ以來海軍生活實に四十年の長期に互つたが、明治二十年から二十二年の間、參謀本部に奉職中、それまでいまの海軍々令部も海軍參謀部として陸軍參謀本部の中にあつたのを、山本權兵衛大將と協力して海軍參謀部を分離獨立させる基礎

を確立した海軍の恩人である。そして同大將は、參謀本部海軍部課長から海軍參謀本部局員となつたが、この海軍參謀本部は今日の海軍々令部の前身なのである。

終生「目覺めよ米國」を高唱

佐官時代には赤城、秋津洲、扶桑、松島各艦長や、横須賀海兵團長、佛國公使館附武官、皇族附武官など歴任し、更に將官に榮進し海軍々令部第一局長、第一艦隊參謀長、常備艦司令官佐世保、横須賀各鎮守府司令長官などの要職を歴任した。しかし瓜生大將は單に武人としてのみでなく、政治に外交に各方面にわたつて、わが國運の進展に捧げた功績は多大なものであつた。佛國公使附武官のときは、日清戰爭中で同國に在つて、國策遂行、同國輿論の指導や情報の蒐集に努力し、また北清事變中には作戰主務局長として、その適切なる畫策をもつて戦局の全般に貢獻するところ甚大であつた。

殊に海軍部内では米國通の第一人者であつた瓜生大將は、明治、大正兩時代にわたり數回渡米して日米問題の研究と對策に苦心盡力したものである。彼の支那事變勃發に際しては、老軀病床にありながら、みづからペンを執つて多數の米人舊知の名士に對して書を送り、誤れる對日認識の是正を勸告するなど、その死にいたるまで、一念國家の前途を憂慮してゐたのであつた。

日露大戦争の開戦劈頭、仁川における陸軍揚陸の重大任務を完了したばかりでなく、敵艦二隻を港外に撃破し、畏くも 明治天皇より勅語を賜はつた瓜生大將は、その最後まで『目覺めよアメリカ』と高唱してゐた。その猛提督瓜生大將は、アメリカがまだ目覺めぬうちに薨去したのは、大將にとつてはどんなに大きな心残りだつたであらうか。だがしかし、それから四年の後、遂に目覺めなかつた暴戻アメリカの頭上に、膺懲の大鐵槌を下される日が來たのだ。ハワイ眞珠灣の緒戦以來の、大東亞戦争の無敵皇國海軍の赫々たる戦果を聞いて、瓜生猛提督の靈は地下に微笑んでゐることであらう――。

武勳輝く長谷川大將

同期も傑物揃ひ

『長谷川さん（臺灣總督）、寺島さん（逓信大臣）などの同期のお方は偉いお方揃ひでしたね。枝原さんはお健康上から中將でおやめになりましたが、加藤さん（隆義男）、長谷川さん、及川さんのお三人はお揃ひで大將におなりになり、寺島さん、植村さん、河野さん、松下さん、藤吉さん、市村さん、津田さん、後藤さん、小林さんなど中將におなりになり、現在豫備役のお方が多いやうでいらつしやいますが、みなお健康でそれ／＼の大切なお役目におつきになつて、お國のためにお盡しになつていらつしやいますが、あの同期のお方たちは

お若い頃から特に友誼に厚いお方たちのやうでした。」

小松刀自の語るのは兵學校第三十一期生のこと、枝原百合一中將をトップに日露戦争の前の明治三十六年十二月卒業した同期生のことである。當時兵學校を巣立つた百八十八名の少尉候補生は、翌々月の三十七年二月日露大戦の大詔下るや、いづれも各艦に乘組み勇躍出征し海の若武者にとつて千載一遇の大戦の槍舞臺に颯爽と登場し、戦史に赫々たる武勳を輝かしたのであつた。

有名な日本海大戦の『三笠艦橋の圖』の中に、東郷司令長官の幕僚の中にあつて海圖を見詰めてゐるのが、枝原中將の若き日の姿である。また東郷長官の後方正面に測距機を覗いて敵艦との距離を測つてゐるのが長谷川大將の若き日の参戦の姿である。

枝原中將は、東郷元帥の『海軍航空部隊の充實』の意を體して、大佐時代から航空方面に轉じ、その緻密な頭腦から主として飛行機の研究に挺身し、横須賀海軍航空廠設立にあたり初代の航空廠長となつた。今日の無敵海の荒鷲の育ての親として、精銳機の研究建造に捧げた貢献は多大なものである。

寺島提督

兵學校卒業のときは寺島健中將が四番で、長谷川清大將は六番であつたが、上席の者が亡くなつたり豫備役になつたりしたので、加藤隆義大將と長谷川大將、及川古志郎大將が上席になつた。寺島中將は第二艦隊参謀長、教育局長、軍務局長、練習艦隊司令官と榮進し中將で勇退して浦賀船渠株式會社々長となり、支那事變勃發以來『造船報國』に挺身してゐたが、東條内閣組織に際し逋信大臣兼鐵道大臣として登場した。今や大東亞戦争下、南に北に、軍備に經濟に國力進展に最も急務とする海運界の充實に、その優れた見識と手腕を發揮して活躍してゐる。

長谷川大將は國際聯盟の軍縮會議専門委員や全權となり、米國駐在武官もつとめ外國生活が永く、また海軍次官や吳海軍工廠長などを歴任したが、横須賀軍港とは馴染み深く寺島中將と

共に「小松」最良であつた。それは少壯士官時代は軍艦生活をつゞけ、大佐時代は長門艦長、少將のときは横須賀鎮守府参謀長、第二潜水戦隊司令官として横須賀を中心に活躍し、支那方面艦隊司令長官から横須賀鎮守府司令長官となり、軍事参議官となるまでは横須賀に在つたのである。

造船報國の山本中將

こゝに機縁ともいふべきことは、長谷川大將が横鎮長官のとき同期の寺島中將は浦賀船渠社長であり、またこれも同期の山本幹之助造船中將（豫備）は浦賀船渠工場長だつた。それで浦賀船渠で艦船の命名進水式を舉行のときは、長谷川大將は横鎮長官として臨場するのであるが式の順序として進水作業の現場員の段階を経て最後に、山本工場長から進水準備の整つたことを寺島社長に報告し、寺島社長は更に長谷川長官に申告し、茲にはじめて進水命名書を長官か

ら社長に授けられ、新しく誕生する艦船の命名があつて社長、工場長、それから進水作業の現場員へと前と逆の順序で進水開始が傳へられ、支綱切斷によつて新造艦船は處女波ザンブリと斷つて晴れの進水を行ふのである。その晴れの嚴肅な進水式場は、長官、社長、工場長といふ三首脳部が、はからずも兵學校の同期生——禮装いかめしい海軍大將の長谷川長官を主座として、モーニング姿の民間會社の社長、工場長によつて満場の拜觀者注視裡に進水命名を舉行されるのであつた。この劇的光景の裡に、事變下幾多のわが海の精銳が晴れの誕生をしたのである。

山本造船中將は、兵學校では、長谷川、寺島提督たちと共に學んだ秀才だつたが、短艇訓練のときに不慮の事故で脚部に負傷したため、兵學校を中退し、兵科を轉向して帝大工科に入り造船學を専攻して造船士官となつたのである。そして累進して造船少將時代には横須賀海軍工廠造船部長の榮位に就いたが、その間幾多の巨艦精銳を誕生せしめ、中將のとき豫備役となり浦賀船渠工場長となつて、民間にあつて造船報國に挺身してゐる斯界の權威である。いはゆる武人型なところはなく、常識的で思慮のゆたかな温厚明朗な人で、わが海軍と民間造船界の恩人である。

準備ある者は最後の勝利

長谷川大將の支那方面艦隊司令長官としての武勳はあまりにも著名であるが、同大將は中將時代に大角、永野兩海相に仕へ「剃刀次官」の名を謳はれたが、昭和十一年十二月第三艦隊司令長官となつて久し振りに海上に乗り出し、翌十二年七月支那事變の勃發となり、旗艦出雲に坐乗して上海を中心に活躍したのである。事變勃發當時最悪のコンディションを克服し、同胞居留民の保護引上げに一方ならぬ苦心をなし、戦線擴大するや陸戦隊の勇猛果敢な奮戦、支那沿岸封鎖を斷行し、支那事變の緒戦において海陸双方とも大戦果を擧げて、海軍陸軍とも連戦連勝の基礎を築き上げたのであつた。

同大將は、その見透しの敏速と正確とは、海軍部内でも有數であり、豪放なところはなく、さればといつて周到緻密であるといつた風のところも微塵も見せず、それでゐて、ちやんと鋭

さを秘めてゐるといふやうな人である。頭は冷く冴え、肚は大きく温い名提督で、軍政と外交的手腕は部内切つての折紙付きである。

『準備ある者は最後の勝利者なり。』

これが長谷川大將の座右の銘である。福井中學の二年生のころ先生から教はつて以來、ずつと守り通してゐるといふ。また、

『大言壯語する者は眞の勇者ではない。黙々として實行するのが眞の勇者である。縁の下の力持も大切な一と役である。』

と部下を訓してゐる。議論抜きで要點をしつかり掴み、總てを圓滿に正しく處理して行く同大將にしてはじめてこの言葉があるのだ。出征中は日本帝國提督として、寢巻姿や醜い姿で敵弾に斃れるやうなことがあつてはいけなさと、まる二年間の軍艦生活中に軍服を一度も脱いだことがなかつたのみならず、便所の中に入るのにも心したといふやうな緻密さであつた。

その部下を愛する温情も有名なものである。支那方面艦隊兼第三艦隊司令長官として赫々たる武勳を輝かし、興亞建設の基礎を築いて十四年四月晴れの歸還をなし、五月には十年前に參謀長として勤めた横嶺に司令長官の錦衣を纏ふて就任したが、着任早々の日に先づ海軍病院を

訪れ、上海方面で激闘して戦傷した舊部下を一々ねんごろに慰めいたはり、その温情には白衣の勇士もみな泣いたのであつた。そして少しの暇を得ては戦歿者の遺族と戦傷病兵を慰めてゐたので、それらの人たちをはじめ部下から慈父と仰がれてゐた。

中將から輝く海軍大將に親補された際は『これもみな部下のお蔭だ。』と、先づ海軍病院の部下白衣勇士や、海の荒鷲の猛者だつた故得猪中佐未亡人をはじめ、出征軍人遺家族を長官々邸に招待して榮進の歡びをわかち、あるひは櫻花の下に戦傷勇士や遺家族を招き、共に春を語るなど、常に一喜一憂を共にし麾下全將兵の信愛を集めてゐた。揮毫はあまり好まなかつたが乞はれれば必ず約束を果すといふ几帳面振りで、興亞の礎石となつた英靈の墓碑銘はもとより神社の社標揮毫等にまで私的時間を割いてなほ足れりとせず、萬骨の芳魂を弔ふ至情には市民を感激させたものだつた。

戦傷の痕奇蹟的に消滅

『長谷川さんは、まことに武運のお強いお方です。日露戦争のときも、支那事變でもさうなのですよ。』

小松刀自が語つたことがあるが、事實、日露戦争のときは二度戦傷したのであるが、かなりの重傷が全癒し、傷の痕も残らぬやうに綺麗によくなつてしまつたのを長谷川大將自身から筆者はその傷痕を見せていたゞいたことがある。

これは最初は明治三十七年八月の黄海々戦において、旗艦三笠艦上で奮戦した長谷川少尉は、三笠に命中炸裂した敵砲弾片のため胸部から腹部へかけて名譽の戦傷を負つた。日本海大海戦にはあの激戦にも幸ひ微傷も受けなかつた。ところが日露戦争が終つて、三笠が佐世保に凱旋入港したとき、火薬庫が爆發の不祥事が突發して沈没してしまつた。——當時東郷司令長

官は上京中のため幸ひ危難を免れたが、武勳輝く凱旋の同艦乗組將士中死者三百餘名、重傷者二百餘名といふ多數の犠牲者を出したのであつた。この大惨事の起つたとき、中尉で甲板士官だつた長谷川大將は、火薬庫の爆發の飛沫を全身に浴びて、顔面や手足に火傷を受けたのであつた。

この火傷と、黄海々戦のときの戦傷は、行きとゞいた治療によつて癒つたが、顔面と胸部にかなりの傷痕が残つてゐた。それがいつの間にか跡方もなく綺麗さつぱりと、奇蹟的に消えてしまつたのである。

また支那事變では、緒戦以來旗艦出雲に座乗し、上海の黄浦江上に在つて敵支那軍の執拗な連続的の砲撃、爆撃攻撃を受け、魚雷攻撃も受けたこともあつたが、みな一發も出雲には命中しないのであつた。

これには敵も不思議がつてゐたが、第三國の者などは、

『出雲は奇蹟の軍艦である。この混亂危険な上海には一點の安全地帯もなく、絶対避難場所もないが、たゞ出雲艦が唯一の安全な避難所である。』

と驚嘆してゐた。そして避難や貴重品の保管を出雲でやつて欲しいと願出た外人があつたと

いふほどだつた。そんな珍妙な沙汰は、もちろん取り上げる筋のものではないが、いづれにしてもこの出雲の武運の強いことには驚くべきものがあつた。——これに就て長谷川大將は、『大御稜威の下、天祐と申すほかなく、まことにありがたいことでした。』と、歸還後筆者に語つたことがあつた。

痛惜、大角大將の殉職

死地を戰場に得たる本懐

「えッ、大角さんがおなくなりになりましたつて？ そりやまあ、ほんたうに惜しい惜しいお方を……」

斯う言ふて、九十三歳の小松刀自は老眼に涙をいつばいに湛えて、衷心から悲しみ悼み、いかにも哀悼の念に堪えないものゝやうであつた。

それは一昨昭和十六年の二月五日、南支方面の作戦地軍狀視察の重い任務を帯び、海軍々用機に搭乗し廣東より海南島に向ふ途中、黄揚山々頂に激突し、大角岑生海軍大將をはじめ海軍五將校並に海軍々屬日航職員四名は遂に殉職したことが確認され、海軍省から公表されたときだつた。

大角大將遭難殉職の悲報は、海軍部内はもとより支那事變中の最大不幸として國を擧げて痛惜したが、特に同大將と因縁深い軍港都横須賀市民は衷心哀悼し、中にも大角大將を少尉時代の昔から知り、そしてその人となりを敬慕してゐた小松刀自の悲痛はひとしほ深いのであつた。

東郷元帥、加藤寛治大將などに次いで、大角大將は永らく海軍部内における元老として重きをなしてゐた。その軍政の手腕は内外に認めるところとなり、犬養、齋藤、岡田の三内閣に海軍大臣に任ぜられること三たび、現役大將の最古参であり、軍事参議官男爵といふ肩書が示すやうに軍人として登り得る最絶頂を極めてゐた。

明治二十年代、伊勢灣に海軍大演習があつたとき、樺山資紀海軍大將が大禮服いかめしく名古屋城へ天機奉伺に赴くとき、同大將を見た當時の大角少年は『俺も海軍大將になるんだ』と一念發起海軍を志願したといはれるから、この一念既になつてゐたわけで、死地を戦場に得た大將の一生こそ武人の榮譽に輝くものであらう。

明治三十一年少尉に任官し、日露戦争には旅順港の決死隊員となつて戦争に参加し武勳を輝かし、昭和五年のロンドン條約問題では武断派と文治派の斡旋に骨を折り、硬軟兩派の對立激化緩和の功勞の甚大だつたことは有名である。その後軍政方面に次第に手腕を發揮し、ロンドン條約の後の渦をまとめて今日の海軍の威容をつくりあげた功績は大きく、更に五・一五事件及び二・二六事件後の收拾の手際とその政治的見識は、各方面より高く評價され、從來政變の度ごとに首相候補に擬せられてゐたもので、これを見ても大角大將の社會各層よりの名望のほどが判るのであつた。

萬人敬慕の海の名將

時局多事多端の折柄に、大角大將の如き巨人を失つたことは、海軍だけでなく日本の一大損失であるが、同大將の殉職は戦死と同様であり、日本の軍部が、大將より兵士に至るまで如何に緊張して活躍してゐるかを雄辯に物語るものである。

舉國一致の體制をもつて國難突破の決意を示し、尊き護國の英靈と化した大角大將は、公私とも敵のない豪放にして磊落、しかも緻密細心で親しみ深く、何人にも敬慕される名提督であつた。

斗酒なほ辭せず、タバコの方も一日五、六十本を喫ふ。五尺二寸の體軀に二十貫近い張り切つた重量を抱擁し、嘗つて病氣といふものを知らない健康そのものゝやうな大角大將は、その率直にして和氣霽々たる人格は、數多くの逸話を傳へてゐる。――

敵前で正宗ラツパ呑み

日露戦争には、大角大將は當時大尉として武人の本懐とする大檜舞臺に登場して活躍した。彼の有名な旅順港閉塞隊の第三回目の壯舉を執行されたとき、大角大尉は決死隊將士指揮官の重い任務に就いた。閉塞船釜山丸に乗組んで、夜陰に乗じて旅順港に迫つたのである。各將士は重大任務を擔ふてみな意氣軒昂、目的地點に向つて逸る心を押し鎮め、黙々と行動を開始したのであつた。

しかるに時も時、その釜山丸は機關に故障を生じて、二進も三進も動くことが出来なくなつた。指揮官の大角大尉も、さすがに「これは困つた」と思つた。それと知つた決死隊の勇士たちは氣が氣でない。生還を期さず一刻も速く目的地點に到着しようとしてゐるだけに、みな昂奮してしまつて、某士官の如きは、

『この際、船が動かぬとはどうして呉れるのだ。これは機關長の責任だ。』

と憤慨し、重大任務を前にして喧々轟々たる有様であつた。そのみんなの昂奮し焦慮してゐるところへ、冷靜沈著そのものゝやうな態度で、大角大尉が靜かにやつて來た。そしてみんながビツクリするやうな大きな聲で怒鳴つた。

『おい、みんな、まだ時間があるぞ。機關部のごときは機關部の者にまかせろ。それまで落ちついて、銳氣を養つて置け！』

大角大尉は、いつ何處から持ち込んだのか、部下の水兵に命じてたぐさんの正宗の瓶詰を運ばせて、決死隊の勇士たちに配ばらせると、まづ自分からラツパ飲みをはじめた。

『敵を前にしての、別れの酒はまた格別だよ。』

と、美味さうに飲んでゐるその豪膽さに、並居る勇士も呆氣にとられてしまつた。そして一時はどうなるかと危まれた論議もフツツリとやめて、その命令に従つたのであつた。

『逸る血氣の勇』を戒めて、大角大尉が執つた處置はまことに見事なものであつた。逸る部下を進めるよりも、これを制することの方が如何に至難なことであるかは、知る人ぞ知るである。——釜山丸は不幸にして閉塞隊の任務を完全に決行出来なかつたが、大角大尉の存在は、

この閉塞隊以來大いに上官に認められたのであつたといふ。

世界外交檜舞台で活躍

大角大尉は大佐時代に、海軍省高級副官を滿二年間勤めて、朝日艦長に補せられ、再び海上に乗り出した。そして浦鹽に派遣を命ぜられたことがあつた。このときは、堂々と日本帝國海軍を代表して、米國艦隊と協同の某重大任務を背負つてゐるのだつた。その間、國際的の折衝など、むづかしい政治的手腕を必要としたが、大角艦長は、圓滑滑脱な外交と斷乎たる確信のもとに一切を難なく處理して、大任を果して歸朝した。當時、米國の提督連は『大角』の非凡な手腕に、驚異の眼を放つてゐた。そして、

『見てゐろ、いまに、オ、スミが、日本の海軍を牛耳る日が必ず來るぞ！』

と噂しあつたものだつた。果せるかな、十數年の後、その豫言は見事に的中したのである。

——米國提督連も、もつて先見の明ありといふべきである。

それから『オ、スミ』は、佛國駐在武官、第一次世界大戰の講和全權委員隨員、國際聯盟總會帝國代表者隨員、平和條約實施委員、國際聯盟陸海空軍問題通常設諮問委員會における帝國海軍代表者隨員として、海軍々人として世界外交の檣舞臺に活躍してその手腕を發揮し、益々磨きがかゝつて來たのであつた。

佛國を中心に三ヶ年間、歐洲を駆けづり廻つてゐるうちに少將となつて、海軍々令部參謀となり更に歐洲にとゞまつてゐたが、大正十年七月、凱旋將軍と同様の輝かしい榮譽を擔ふて晴れの歸朝をした。

實戰舞台でも軍略の雄

歸朝してからも引きつゞいて海軍々令部出仕兼海軍省出仕、横須賀鎮守府附、軍務局長、海

軍將官會議々員などの要職を歴任したが、大正十二年の十二月一日、第三戰隊司令官に補せられた。大角少將は、海軍提督とはいへ、陸上の顯職にばかり携はつてゐて、實に滿六年振りの海上乗り出しであつた。

その第三戰隊司令官に任命されたとき、大角少將は早速横須賀軍港にやつて來た。そして、『小松』を訪れ、

『おばあさん健康か。久し振りにやつて來たよ。』
と、大いによるこんだものである。

『やれ／＼、これで暫く振りで、やつと手足を思ふ存分伸ばされる。』
といつて、小松刀自に次ぎのやうな面白いことを話された。

『われわれは、水中動物の鰐のやうなもので、陸上にあがつても少しはよいけれど、永く陸上にゐると動きがとれなくなるよ。水中深く游泳してゐればこそ、うまい魚もとつて食はれる。それが陸上では、まさか人間さまを食ふこともならず、イヤ油斷をすれば却つて捕まつて食はれてしまふかもしれないのだ。机の塵と、書類の山に挟まれては、銳氣が失せてしまふから、チヨイ／＼息抜きに、大海を泳ぎ廻つて來る必要があるよ……。』

斯う言つて、鰐のやうな大きな口をあけて『ワツハツハハ……』と笑つて、早くも大洋に乗り出して、鯨や鱈の御馳走を目の前に捕へたやうに海に行くことを喜んだものである。

だが、鰐は水陸兩棲動物だ。水の中でも強いし陸に上つても強い。恰も大角提督のやうなものだ。最新鋭の輕巡艦をもつて編成された當時の第三戦隊は、イザといふときには國防の最前線を馳驅して、その快速と威力にものをいはいはしめる精銳戦隊だつた。

第三戦隊司令官としての大角提督は、その少年時代腕白で鳴らした負けじ魂を、思ふ存分に發揮したものだ。訓練、演習などの際にも『第三戦隊』は、山椒は小粒でも……といふわけその威力には艦隊將士もピリツとしたもので、實戦舞臺においても軍略家としての大角大將の面目躍如たるものがあつた。

元帥と大將を語る

元帥府は海陸軍大將中の大將で、最も勳功ある者がこれに列せられる。そして元帥の稱號と元帥佩刀と、元帥徽章とを賜はり、軍事上の最高顧問であり、最高優遇である。また元帥は海軍とか陸軍の元帥といふのでなく、元帥海軍大將、または元帥陸軍大將と冠稱されるのであつて、元帥は終身現役である。

元帥府始制以來元帥の稱號を賜はり、軍人として最高優遇の光榮を享受した海軍大將は次ぎの通りである。

畏くも宮様におかせられては、有栖川宮威仁親王、東伏見宮依仁親王、伏見宮博恭王の御

三方におはします。そして現役であらせられるのは、伏見宮博恭王御一方でおはします。皇族以外においては、西郷従道侯、伊東祐亨伯、井上良馨子、東郷平八郎侯、伊集院五郎男、加藤友三郎子、島村速雄男の七元帥であるが、いづれも故人となつて海軍大將の元帥は臣下には現在一人もない。

海軍創立以來の大將

昔から大臣、大將といつて、一は文官の最高地位であり、一は武官の最高峰であるが、政局がめまぐるしかつた近年では、大臣の名を一々記憶してゐる人たちも少いやうである。これに反して大將は指折り數へるほどしかない。

ところで帝國海軍創始以來、海軍大將は何人に及んでゐるであらうか。明治以來の各海軍大將を列擧して見る。

元帥でおはします宮様の有栖川宮威仁親王、東伏見宮依仁親王、伏見宮博恭王の御三方をはじめ奉り、臣下では西郷従道侯、樺山資紀伯、伊東祐亨伯、山本權兵衛伯、川村純義伯、柴山矢八男、井上良馨子、東郷平八郎侯、鮫島員規男、日高壯之丞男、伊集院五郎男、片岡七郎男、上村彦之丞男、出羽重遠男、齋藤實子、瓜生外吉男、三須宗太郎男、島村速雄男、吉松茂太郎、藤井較一、八代六郎男、加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎、村上格一、有馬良橋、山屋他人、財部彪、黒井悌次郎、野間口兼雄、枋内勇次郎、鈴木貫太郎男、竹下勇、小栗孝三郎、岡田啓介、井出謙治、加藤寛治、安保清種男、百武三郎、谷口尙眞、山本英輔、大角岑生男、山梨勝之進、小林躋造、野村吉三郎、中村良三、末次信正、永野修身、高橋三吉、藤田尙徳、米内光政、百武源吾、加藤隆義子、長谷川清、及川古志郎、鹽澤幸一、吉田善吾、山本五十六、島田繁太郎、豊田副武、古賀峰一

右の通り、宮様方を別として、海軍大將は六十一名といふことになるが、しかし物故したものが半數以上に及んでゐる。

そして一番はじめに海軍大將となつたのは西郷侯であるが、同大將は明治二十七年に陸軍中將から海軍大將になり、また二番目の樺山伯は翌二十八年に陸軍少將から海軍少將となり、更

に中將から大將に昇進したものである。これは現今から見ると頗る妙なやうであるけれど、明治初年の當時は、海軍も陸軍も軍防事務局といふ局で軍務を掌つてゐたもので、更に兵部省になつてからも海陸軍を統率して居り、兵部省が海軍省、陸軍省と二省に分離獨立してからはじめて本格的な海軍の建設となつたのであり、最初は陸軍が主であつたから陸軍將官から海軍將官に轉じたといふことも無理もないことではある。そして三番目に海軍大將となつた伊東祐亨伯こそは、年少時代から海軍一本槍に教育鍊成された純粹の海軍出であるから、同伯を海軍大將の嚆矢と見なしても差し支えなからう。これに續くのは井上、東郷、山本、威仁親王、川村、柴山、鮫島、日高、片岡、上村各大將といふ順序である。

同期生から揃つて大將

聯合艦隊司令長官山本五十六、海軍大臣島田繁太郎、軍事參議官鹽澤幸一、同吉田善吾の今

を時めく四大將はいづれも海軍兵學校のクラスメイトであるが、同じクラスから四大將を出したことは近來の異彩であつて、時局下たのもしくも心強い限りだ。加藤、長谷川、及川の三大將が同期生であることは前に述べた通りである。

ずつと前の卒業生では三須宗太郎、出羽重遠、伊集院五郎（元帥）の三大將が同期生であり島村速雄（元帥）、加藤友三郎（同）、吉松茂太郎、藤井較一の四大將が同期生である。この四大將は兵學校第七期で、明治十三年の卒業であるが、元帥を二人も出してゐるのはこの期だけである。島村大將が首席で卒業したのであつて、珍らしい秀才揃ひの組である。

明治二十二年といふと日本が海軍充實に本格的の力瘤を入れて來た時代だが、その年に兵學校第十五期生としてなか／＼傑物揃ひを輩出してゐる。即ちトップで卒業したのが元海相の財部彪大將だ。それに岡田啓介元首相や、海軍部内の傑物として鳴らした竹下勇、小栗孝三郎各大將も同期であり、旅順港閉塞決死隊の軍神廣瀨武夫中佐も右の四大將の級友だつたのである。

財部大將などより五年前の第十期卒業生は、加藤定吉大將がトップで、山下源太郎、名和又八郎各大將がある。三大將とも日清、日露兩戰役には中堅海軍將校として頭角を現はしてゐた

が、日露戦役にはいづれも活躍盛りの大佐となつて、加藤大佐は第一艦隊の新鋭装甲巡洋艦春日艦長（副長は岡田啓介中佐）として實戦舞臺に登場し勇名を轟かした。山下、名和兩大將は前者は軍令、軍政の權威で大佐時代には大本營附參謀として活躍し後に軍令部長の要職に就き後者は戰略戰術の大家と謳はれたものである。

軍事參議官高橋三吉、同藤田尙徳、元首相の米内光政の三大將も同期生である。この三大將と兵學校に共に學んで、早くも壯烈殉職の花と散つたのは佐久間勉大尉である。佐久間大尉とは彼の明治四十三年四月、第六潜水艇沈没事件に烈々鬼神をも泣かしむる遺書を殘して、海底に散華したあの有名な『佐久間艇長』のことだ。

そのほか有馬良橋、山屋他人兩大將は兵學校第九期の同期生であり、一期あとの黒井悌次郎野間口兼雄、枋内曾次郎の三大將も同期生であり、また加藤寛治と安保清種兩大將、百武三郎と谷口尙眞兩大將、小林躋造と野村吉三郎兩大將、中村良三と末次信正兩大將など、それ／＼同期から揃つて二大將を輩出したのである。

大將は兵學寮、兵學校の各期から必ずしも出してゐる譯ではない。齋藤、鈴木、井出、八代山梨、永野各大將は一期からたゞ一人の大將榮進であつて、期によつては一人も大將を出さな

かつたこともある。殊に明治二十六年から二十九年まで（第二十期——二十三期）の四年間は、あの日清戦争を中に挟んでの卒業であるが、どういふものか一人も大將が出てゐないのである。

また伊東、井上、東郷、各大將は、兵學寮や兵學校卒業者でなく、いづれも明治初年に少壯士官中から成績優秀なものとして選抜されて、歐米各國に留學して異邦の海軍將士の中に交つてあらゆる辛慘を嘗めて研鑽を積んで歸朝し、わが海軍の先覺者となつたのである。なほ瓜生大將は、最初兵學寮に入つてから後に米國に派遣され、あちらの海軍兵學校に留學したのであつた。

海軍大將を待遇の方面から見ると、陸軍大將と同様に親任官であつて、宮中席次は樞密顧問官と同格で、國務大臣、朝鮮總督、樞密院副議長に次ぐ第一階の第十級に位してゐる。文官の親任官や貴衆兩院の議長、功一級、公爵などの上位にある。また俸給は、年俸六千六百圓で樞密院議長、特命全權大使、大審院長、檢事總長、臺灣總督などの親任官と同額で、國務大臣の六千八百圓より少し落ちるが、企劃院總裁、樞密顧問官よりも多い。

中將から大將に昇進するには、海軍も陸軍も同様に中將在任滿六年以上といふことになつて

ゐる。それから現役の定限年齢は、少尉から中將までは海軍と陸軍とはかなり違ふけれど、大將は海陸軍を通じて六十五歳である。

海軍大將と出身地

およそ郷黨から偉人とか傑物が世に出ると、同じ郷黨の後進者はその偉人傑物にあこがれて目ざす道と同じ道に求めやうとする傾向が多分にあるものだ。新舊海軍大將を出身府縣別に調べて見るのも興味が深い。もつとも中には地方出身者で後年東京に轉籍し東京出身者といはれてゐるものや、その府縣なるものがたゞ出生地といふだけのものなどもあるけれど、なるべく『出身地』として適切な各府縣別に分類することにした。

◇鹿兒島——西郷從道。樺山資紀。伊東祐亨。川村純義。井上良馨。山本權兵衛。東郷平八郎。柴山矢八。伊集院五郎。鮫島員規。日高壯之丞。片岡七郎。上村彦之丞。野間口兼雄。

竹下勇。山本英輔。

- ◇佐賀——村上格一。百武三郎。安保清種。百武源吾。吉田善吾。古賀峰一。
- ◇岩手——山屋他人。栃内勇次郎。齋藤實。米内光政。及川古志郎。
- ◇福井——名和又八郎。岡田啓介。加藤寛治。長谷川清。
- ◇高知——島村速雄。吉松茂太郎。永野修身。
- ◇廣島——加藤友三郎。小林躋造。谷口尙眞。加藤隆義子。
- ◇石川——瓜生外吉。小栗孝三郎。
- ◇和歌山——有馬良橋。野村吉三郎。
- ◇山形——黒井悌次郎。山下源太郎。
- ◇愛知——八代六郎。大角岑生。
- ◇青森——藤田尙徳。中村良三。
- ◇福島——出羽重遠。
- ◇岡山——藤井較一。
- ◇滋賀——三須宗太郎。

- ◇宮崎——財部彪。
- ◇千葉——鈴木貫太郎。
- ◇宮城——山梨勝之進。
- ◇山口——末次信正。
- ◇新潟——山本五十六。
- ◇長野——鹽澤幸一。
- ◇東京——加藤定吉、高橋三吉。
- ◇静岡——井出謙治。
- ◇大分——豊田副武。

右の通り、鹿兒島が斷然群を抜いて十六名に及んでゐる。次ぎはずつと少くなつて佐賀の六名、岩手の五名、廣島、福井の四名、高知の三名がこれに續いてゐる。しかし現存の大將からいふと、佐賀は村上大將が物故したゞけで、あとの五大將は健在で、鹿兒島、岩手、福井、和歌山、青森の各縣が二大將づつといふことになる。明治時代の海軍の鹿兒島は、大正から昭和初年へかけて、岩手、福井の海軍といはれてゐたが、現在では佐賀の海軍の觀がある。

もつとも、財部大將は宮崎出身でも鹿兒島と見られて居り、安保大將は佐賀出身だが廣島と見られてゐるものである。

いづれにしても、何々縣の海軍といふやうな消極的なものでなく、全日本の海軍であるが、未だ海軍大將を一人も出してゐない府縣が各府縣の半數以上に及んでゐる。これから將來、全國各府縣からどしどし、元帥大將を大いに輩出すべきである。

海軍とニュース

從軍記者のはじまり

海軍に關するニュースに就ては、海軍省に黒潮會、横須賀鎮守府に太平洋會といふ記者團の會

があり、吳、佐世保、舞鶴各鎮守府などいづれもその出入新聞記者團が、當局の許可のもとに設けられてあり、大臣官房とか副官部、軍事普及部などから發表されたものを通信し、各新聞紙上に報道してゐる。大東亞戦争下の今日においては、大本營海軍報道部から重要な戦争や人事に關するニュースの公表があり、各新聞社の係り記者たちは眼を光らし、耳をそば立て、發表のあるごとに鉛筆と原稿用紙を兩手に、それ電話、そら自動車と縦横の活躍をしてゐる。新聞に初めて戦争記事を發表したのは、あのナポレオン戦争（百二十七年前）のワーテルローの戦のとき、ロンドン、タイムスから特派された従軍記者が、戦報を傳へたときで、その機敏な報道は世界の人々をあつといはせた。また八十八年前のクリミア戦争には、やはりロンドンタイムスから派遣されたラッセルといふ記者が、最初の従軍記者だといふ説もある。いづれにしても、このラッセルの活躍してゐた頃は、『一新聞の威力は、一個師團の兵に匹敵する。』といはれるほど英國あたりの新聞は發達してゐた。殊にこのラッセルのクリミア戦争従軍記は時の英國アパチー内閣を倒潰せしめ、軍司令官ラグソン卿を自殺せしめたといふ程の威力があつた。それといふのは、英軍の遠征兵士が、榮養不良と疫病のため續々斃れるのを見て、本國當局の不用意と、處置の不當を痛烈に攻撃したからであつたといふ。それにしても、内閣を倒

壊させたり、軍司令を自殺させたり、これはまたあまりに新聞の威力を發揮させたものだ。今や東亞に完全に叩きのめされてゐる英國海陸軍の現状に照應して、英國の新聞の威力が低下したのか、チャーチルの心臓が強すぎるのか、今昔を比較して見ると面白いではないか——それはそれとして、このラッセルの記事を読んで奮起したのが、彼の英國の貴族の娘ナイチンゲール嬢であつた。彼女は、かよはい貴族の令嬢の身をもつて、同志を募り特志看護婦隊を組織して遠くクリミアの戦場に赴き、赤十字の起源を生んだのであつた。

新聞界の先覺者岸田吟香

わが日本の最初の従軍記者は、岸田吟香氏であつた。明治七年の臺灣征討のとき、東京日日新聞社の岸田吟香氏は、歐洲各國では戦時の場合、必ず新聞記者も従軍するから許可されたいと願出たところ、都督府では戦争は密なるを尊ぶといふので、新聞記者を従軍させるなどとは

以てのほかだと、許可されないのだつた。岸田氏はいろ／＼考へた揚句、軍夫の元締大倉組に頼み込んで、その輩下となつて、従軍を企てた。それで大倉組では、月手當二十五圓を呉れて連れて行くことになつた。ところが臺灣に到着してみると、都督府の方でも考へ直したのか、一躍吟香に通譯掛を命じ、月給七十五圓、外に手當五十圓也といふ當時にしては莫大な給與をして、厚遇したのであつた。

とにかく、當時の新知識岸田吟香氏が、率先挺身して臺灣征討軍に従軍したのが、わが國最初の従軍で、いはゞ従軍記者の元祖である。

——この岸田吟香氏は幕末時代に、日本を中心として大東亞經綸の志を立て、支那大陸に渡り、同志と共に上海を中心に中支から奥支に互つて活躍し、艱難辛苦を重ねたが、素志を貫徹するに至らず歸朝し、慶應元年横濱ではじめて瓦版の新聞を發行したわが新聞界の先覺者であつて、また銀座の『精錡水』の元祖として知られてゐる。つゞいて明治十年の西南戦争のときやはり東京日日の福地櫻痴居士が従軍したが、そのとき居士は山縣大將の記録係りを兼ねてゐたもので、その得意の名文の戦況記事は非常な人氣を博したものだつたといふ。

志士横川省三の海軍従軍

それらはいづれも陸軍の従軍記者であるが、海軍の従軍記者は、日清戦争のときが最初であつた。各新聞社から海軍省に願出た記者の中から数名選抜されて、軍艦に乘組み戦線に出たのであつた。

その中に朝日新聞の横川省三氏といふ少壯記者があつて、吉野艦に乘組み、明治二十七年七月の豊島沖の海戦をはじめ、黄海大海戦にも従軍し活躍してゐた。——この横川省三氏は、後年、日露戦争前の風雲急なるとき、同士の沖禎介氏などと共に北滿に潜入し、軍事探偵として挺身活躍し、東清鐵道の鐵橋破壊を企てたが、不幸にしてロシア軍に捕へられ、護國の華と散つた有名な志士である。彼は吉野に乗組んで従軍してゐたときも、豪膽にして細心で、まだ二十歳代であつたが、既に志士とか國士といつた面影があり、艦長や士官たちに非常に愛されて

ゐたさうだ。

文豪獨歩の戦況報道

自然主義文學華やかなりし頃の文豪國木田獨歩氏は、二十歳代で國民新聞社の從軍記者として軍艦千代田に乗組んで出征した。そして詩味溢るゝ海戦々況や軍艦生活描寫を通信して、異彩を放つてゐた。

彼の傑作といはれる『欺かざるの記』の中には、從軍記者となるについての心境を、次ぎのやゝに告白してゐる。

『吾何故に好みて軍艦に乗り込みて生死の間に突入するか。曰く吾を自然のうちに更生せしめんがためなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリテイなる自然の兒とならんことのためなり。また他の言を以てすれば、吾が靈性をして一段の進歩あらしめんためなり……。』

熱情の自然兒たる彼の精神的探求は、まさにさうであつたであらう。その頃の獨歩氏は、まだ詩や小説を書いてゐるいはゆる純粹の文學者ではなかつた。文學好きな熱情の青年の彼は、先づ新聞記者たらんとして國民新聞社に入社し、或るサムシングを欲求してゐるうち日清開戦となつたので、未來の文士たる青年彼は、生と死の境の莊嚴な現實に直面して、その靈性を高めんとしたものと見られる。

そして戦場に行つてゐるうちに、彼は他の從軍記者の如く一般的な戦況報告をするほかに、士官や水兵の生活を描寫したり、上陸地の自然と人間の姿を描寫し、或は洋上の天長節の崇嚴さや、軍艦の將士が郵便物の到着を喜ぶ有様、戦死した敵の將士を見た感想などを、清新な文章で綴つて通信してゐたのだつた。

斯うして彼は、平凡單調な記者生活では果し得なかつた独自の文才を、從軍記者、しかも海軍に從軍して、前人未踏の筆の世界を開拓することが出来たのである。

果然、彼の通信文は、當時の銃後の人々に大きい感動を與へた。そして『國木田獨歩』といふ筆者の名聲は、忽ち世間に喧傳されるに至つた。彼は、自分の文才を戦場といふ特異の場面向けて、讀者を感動させ、その野心を満足させやうとの意圖もないわけではなかつたであら

う。しかしそれはそれとして、彼は海軍の従軍記者となつたため、自己の運命を開拓し、文豪となるべき素地を築いたのであつた。

新聞記者と軍艦便乗

日露戦争のときには、軍艦には一切従軍記者の便乗を許されなかつた。各新聞社から海軍省に、乗艦を願出て種々運動したけれども、遂に許可されなかつた。また世界大戦の日獨戦争のときも許可されなかつた。その理由については局外者には明かでないが、陸上と違つて軍艦生活は居室の餘裕も無く、待遇などもいろ／＼困難な點があり、短期間ならともかく、長期間にわたり激しい海上生活を續けるものであり、且つ大海戦の場合などを考慮して、従軍便乗を許可しなかつたものと思はれる。

大正十年、聖上陛下が東宮殿下として御渡歐の際、二大新聞社には軍艦に記者の陪乗を許さ

れることに内定してゐたのが、あとで取り止めとなつたことがある。それは他の新聞社が横槍を入れたために、見合せになつたものと當時傳へられたが、軍艦には定員がきまつてゐるのでたとへ一人でも餘分に乗せることになるゝと編制が狂つてしまふ。殊に長期の航海では、なかなか容易ならぬことになる、だからあの場合、代表者二名ぐらゐはなんとか便宜を計ることが出来たのだが、他社からもわれも／＼と申し込まれたんでは始末がつかぬため、公平を期してみんな斷つてしまつたものと思はれるのである。

戦時や右の如き特別の場合は別として、平時は海軍では新聞記者の軍艦便乗を許されたことが度々あつた。各鎮守府の管下各府縣の艦上簡閱點呼の際の出航や、洋上訓練作業の見學のときなどがさうであり、先年、聖上陛下の小笠原島御巡幸の際も、黒潮會や太平洋會員の記者に便乗を許されたのだつた。

また、事變前までは、練習艦隊には記者の乗組を許してゐた。未來のアドミラルの候補生たちと、鵬程萬里の遠洋航海の壯途に上ることは如何に壯快であらうかと、特派記者に選ばれた者は美望の的となつたものだ。

通信は記者の生命であり、新聞の生命である。その通信する者の任務の重大なることはいふ

までもない。殊に平時と違つて、戦時はなほ更のことである。

軍事と宣傳は、非常に重要な関係がある。軍部においてもその點を理解されて、現下の大東亞戦にあつては、海軍従軍記者は『海軍報道班員』として海軍々屬の待遇で従軍して活躍してゐるのである。一般の戦時報道に對する認識の昂まつてゐる今日、海軍の各方面に従軍し、ペンとカメラを生命に奮闘してゐる報道班員の勞苦を多とすべきである。

南郷少佐の思ひ出

支那事變勃發の三ヶ月目に、無敵わが海の荒鷲部隊の相次ぐ猛襲のため、早くも支那空軍は壊滅に瀕した。そして最後のあがきをソ聯E一六型新鋭戦闘機や、アメリカ製のマーチン重爆

機を主力と頼み、小癢にも抵抗を試みだが、わが海鷲の勇者南郷茂章少佐（當時大尉）の神技によつて撃墜されてしまった。また、十二月三日南京上空で重軽爆撃機、戦闘機など各種の敵機三十機を殲滅した南郷少佐は、益々空の殊勲者の勇名を輝かして、同年の餘日も少い歳末に一旦内地に晴れの歸還をしたのであつた。

戦場と戦友にしばしの別れを告げて、東京市世田谷區玉川上野毛の、嚴父後備役海軍少將南郷次郎氏の許に歸つて來た南郷少佐は、輝く武勲を誇ることもなく、往年の兵學校時代の日さながらに、慈愛深い嚴父や母堂、兄弟思ひの弟妹たちと數日を過ごし、戦塵を拂つてゐた。

明けて昭和十三年の新春早々の或る日、筆者は東京の某雜誌社から、長文の電報を受取つた。その要旨は『南郷大尉は横須賀に行つてゐる筈であるから是非インタビューをして空中實戦談を聽いて二十枚許り書いて至急送れ』といふのである。——ところが、そのとき相憎筆者は實兄の訃報によつて神戸に行つてゐたので、歸宅してその電報を見たのは到着してから間一日おいてゝあつた。その數日前に、南郷少佐が、畏くも秩父宮家において、戦況を言上申し上げたとの新聞記事を読んでゐたが、その後の消息は全然判らないのであつた。早速鎮守府の副官に訊いてみたが、どうも南郷少佐の動靜はハッキリしない。しかし種々探査してゐるうち

に軍艦〇〇に乗組の同少佐は、同艦内か或は軍港に上陸してゐる模様であるやうに察せられるのであつた。

——焦燥の裡にも根氣よく足と眼を活躍させた甲斐があつて、翌日の午後、横須賀驛前通りから逸見波止場へ向つて歩いて来る海軍士官の中から、一人の見覚えのある士官を見通さなかつた。見覚えがあるといつても初対面であつて、寫眞で知つてゐる南郷少佐に相違ないのだからもう不躰も無遠慮も、いつてをられないのだつた。早速呼びかけて名刺を出すと、

『やあ、せつかくだが、急ぐのでね。』

『軍艦の方へ、いつしよに参つてもよいでせうか。』

『行つてもいいが、歸りの汽艇便がどうか。それにこちらの汽艇の出るのも、あと十五分しかない。』

突嗟に考へて、驛前の軍港食堂の喫茶部へ招じ入れた。そのとき南郷少佐は、極めて率直に『話すことはなにもないよ。自分は自分のやるべきことをやるまでだ。』

とのみで、豫期してゐた空中實戦談は、なかなか出ないのであつた。——時刻は刻々と過ぎて行く。

『自分と入れ替りに〇〇大尉が基地に來たので、二人で南京上空に飛んで行つて、空で事務の引き継ぎをした。そして同大尉を南昌の空に送つて行つて、自分は歸つたが、間もなくその初陣で彼は壯烈な戦死を遂げたのは、一生忘れられないね。——』

おだやかな口調で語る南郷少佐の表情は少しも變らないが、心中は感慨無量なるものがあらうと察せられた。——上海、南京、蕪湖、安慶、南昌、更に奥支へと、空襲行三十餘回、八回の壯絶極まる空中戦の體驗を秘めて、胸中に靜かに支那大陸の空の戦場を回顧する南郷少佐は敵地上空に壯烈護國の華と散つた同期生の岡島少佐や吉田少佐、また部下の面影が臉に去來してゐるのであらう。

『獨身者の自分が身代りにでもなれたならば、もう一度戦場に行つて仇討をしようよ。』

靜かに立ち上つて、逸見波止場に向つた。その途中、筆者を顧みて、

『君たちも御苦勞だね。しつかりやつて呉れ給へ。』

——南郷少佐とほか十數名の士官、下士官兵を乗せた汽艇は、靜かに波止場を離れると、軍港の紺青の海面に白波を蹴立て、沖の〇〇艦目さして轟進して行くのであつた。その遠ざかり行く汽艇を見つめてゐるうちに、なんとなしに眼の裡が熱くなつて來るのであつた。

『その最後、この眼で見た。』

七月十八日中支南昌猛襲——「南郷機来る」の衝動を敵に與へ、敵空軍を戦慄の坩堝に叩き込んだ海の荒鷲の花形南郷機は、僚友の仇討に遠征して殊勳を輝かしたが、その羽搏きはハタと終止符を打つて、少佐は永遠に歸らぬ壯烈護國の精華と散つた。

「——敵機は火を吐きつゝ不軌の運動をなし南郷大尉機の左翼と觸衝したるため、大尉の愛機は一瞬にして機體四散し、大尉は機と共に壯烈なる戦死を遂げたり——。」

これが當時の公表戦況の一節である。——その日の戦闘にも南郷機は見事に敵機を撃墜し、第二機を撃墜に轉ぜんと右旋回を行つた瞬間、南郷機に射止められた敵機は、軌道を亂した運動をつゞけ斷末魔の急落下をなしつゝ、アツといふ間もなく加速度の非常な勢ひで南郷機の左機翼に觸衝したので、無念、南郷機は壯烈なる空中分解をしたのであつた。南郷少佐の神技を

もつてしても、如何ともなし難い不可抗力の運命であつて、空中戦闘の花形にふさはしい壯烈な戦死であり、且つ華々しい最後であつた。

敵機撃墜實に五十餘機、ナチス空軍の先驅リヒト・フォーヘンと共に、世界空軍戦史に燦たる一頁を記録した南郷少佐の壯烈なる戦死を「僕のこの眼が見た」といふ涙の手紙がある。それは、壯烈無比な同少佐の戦死に涙する部下の東山市郎一等航空兵曹が、硝煙の香も生々しい〇〇基地から、やはり故少佐の部下だつた横須賀市堀の内、縣市議金子吉藏氏令息金子龍雄一等航空兵曹の許に、八月三日寄せられたものである。壯烈鬼神も泣くその崇高な故南郷少佐の面影をしのんで、龍雄航空兵曹をはじめ傳へ聞く人々は、今更ながら慈愛深かつた少佐を追憶し、想ひ出の涙に咽んだのであつた。次ぎに掲げるのは東山航空兵曹の涙の全文である。

『金子君、内地も暑いことであらう。こちら炎天続きだ。今〇〇基地にゐる。水は一滴も飲めぬ有様だ。もう新聞で知られた事と思ふが、南郷少佐殿（當時大尉）が戦死されたあの日、俺も愛機を驅つて部隊長殿と行動を共にし眼の前でその壯烈な戦死を見た。——その時の氣持、俺のにえくりかへる様なその時の氣持を察してくれ。火を吐いて敵陣地に突入して行つたあの沈著無比な崇高な部隊長殿の温顔、俺の心の眼にしつかりとやきつけられてゐる

る。「きつと仇は討つぞ」と歸還した俺等は誓ひ合つたのだ。焼ける様な天幕の中で永遠に歸らぬ人となられた部隊長殿の面影をしのびながらこのたよりに書いてゐる。空は積亂雲だ。なんだか敵機がやつて來さうな氣がする。部隊長殿の冥福を君も祈つて呉れ。」
この斷腸の手紙を書いた東山一等航空兵曹は、南京、南昌の渡洋爆撃に、故南郷少佐の部下として参戦し、偉勳を謳はれた名パイロットである。

ペルリ……野村大使

海軍回顧談と一脈の宿縁

「なにしろアメリカのペルリが浦賀へ來たあの黒船騒ぎを、江戸の實家にゐて話に聞いて胸をどきどきさせた頃からの昔者ですから、わたしの思ひ出話もあまり古くて、今のお若い方

たちには縁遠いかも知れませんが、海軍その他の知名のお方の印象などをぼつぽつお話してみませう。」

斯う前置きをして語る。小松刀自の談片を拾つて見る。

○ 魚釣はスパイ

ペルリが久里濱に來航したとき、軍艦に乗組の異人の水兵が上陸して、あちらこちらの山を寫したり、また魚釣りをしてゐたさうである。それはみんな陸上の地形を調査したり、港灣の海の深さなどを測量してゐたもので、今でいふスパイだつたのだ。それに氣附いて、幕府の役人がそれを禁止したといふ話がある。

○ 江川太郎左衛門

小松刀自がまだ悦子といつて、浦賀港にはじめて行つた頃の浦賀奉行は、江川太郎左衛門であつた。江川太郎左衛門は、當時文明開化移入の關門の地だつた浦賀奉行に選ばれたゞけに、非常に先見の明があり、また經濟觀念や科學的智識に富んだ人士だつた。内外ともに物情騒然たる當時に、よくその豊富な識見と優れた手腕で鮮かにその大役を掌映してゐたが、江川太郎左衛門の名は、後年郷里の伊豆菰山に反射爐を日本ではじめて創設し、製鐵、大砲

鑄造を企劃したことによつて史上に著名である。

○ 黒船の久里濱

黒船の浦賀といはれるけれど、最初ペルリの來航したのは浦賀の南の久里濱（現在横須賀市部）であつて、この久里濱は社會事業家の山田わか子女史の出身地で、半漁半農の部落であるが、黒船當時アメリカの軍艦の水兵が司厨用に使つた洋式の鍋、その他の器具類がまだ漁家などに保存されてゐる。この久里濱海岸へ昭和二年頃、アメリカの黒船艦隊と同数の五頭の大鯨が迷ひ込んで來て大騒ぎしたことがあつた。東京近海では珍らしいことなので、この生け捕り鯨を京濱方面から見物者が殺到し、時ならぬ賑ひだつた。なほこの久里濱海岸は快適な海水浴場で、ペルリ來航の大記念碑が建立されてゐるが、大東亞戦争下この國辱的記念碑を撤廢すべしとの論が地元から起つたけれど、海軍關係者から『大國民の襟度を見せて存置した方がよからう。』との説に沙汰やみとなつた。

○ 勝安房と西郷從道

幕末の英傑海軍の先覺者勝安房（海舟伯）は體軀は小柄ながら眼光炯々として人を射る如く、全身これ膽の如しといつた風貌で、一見して冒し難い俊傑振りであつた。しかし酒宴の

席などではかなりくだけた持味を利かせてゐたが、勝安房と對蹠的なのは西郷從道侯であつた。西郷隆盛卿の令弟だけに、どつしりした體軀にいつも溫容をたゞえ、一見粗野朴訥に見えても、度量ゆたかな人物であつた。西郷侯は、伏見寺田屋の變に坂本龍馬は刺されたが、彼は屋上に遁れ泰然自若と切腹せんとする刹那、刺客に取圍まれ、堂々と自分の所信決意を披瀝して、却つて相手方を感動せしめ、遂に事なきを得たほどの大人物だけに、事に處し物に當り、つねに堂々たる態度であつたが、宴席などには極めて無邪氣で、酔つて鬢聲をはりあげお國の薩摩の唄などうたつて、打ち興じたりしてゐたものだつた。

○ 南洲の令甥

從道侯の後繼者は貴族院議員西郷從徳侯（陸軍大佐）であるが、從道侯の四男從親氏は、先年海軍機關大佐で勇退した。この西郷機關大佐は、重厚磊落な豪傑肌の人で、非常に部下思ひとして有名だつた。そしてその悠容迫らざる風貌は、伯父の南洲にいちばんよく似てゐるといはれてゐた。

○ 薩摩海軍の面々

西郷從道侯と共に、明治初年から中年の海軍建設苦艱時代の貢獻者樺山大將は、蠻勇提督

といはれたゞけに表面を飾らず一見粗野に見えたが、學識ゆたかに思慮に富み、重厚、至誠をもつ一貫した名海將であつた。樺山大將、伊集院元帥、伊東元帥、井上元帥、東郷元鏡などをはじめ山本、柴山、鮫島、上村、日高、片岡、野間口各大將など海軍の大先輩には薩摩出身者が多いが、いづれも重厚粗朴で表面を銜はず、挺身海軍報國に赤誠を捧げた人士であつた。そして揃つて酒量が多く、壯年時代には盛んに飲んだものであるが、また揃つて書道に長じてゐたやうだ。中にも伊東元帥と山本上村兩大將の書は、雄渾莊重として有名である。

○ 伊東元帥の書

書道といへばこんな挿話がある。山本權兵衛大將が、嘗て太田三次郎中佐を従へて長野縣飯田に行つたとき、某旅館に宿泊すると、その部屋に先輩の伊東元帥の書いた額が掲げてあつた。山本大將はなつかしく思つてその書を読んで見ると、どうも合點のいかない一字がある。たしかに誤字であると考へた山本大將は、早速主人を呼んで「この額は伊東元帥の書には相違ない。しかしわたしはもつと上等の書を必ず書いて貰つてやるから、この額は一つわたしに呉れないか。」と相談して主人から貰ひ受けた。そして歸京後伊東元帥の許に持参し

て「誤字があつては後々まで伊東元帥の名を汚すことになる。誤字があるといふことは宿屋の主人には祕してこれを貰ひ受けて來たのであるが、どうか一つ替りの物を書いて送つてやつて下さい。」と依頼した。伊東元帥はこの細心周到な山本大將の取計ひに深く感謝して、早速替りの書を送つてやつたのであつた。

○ 有地猛將軍と第二世

日清戰爭時代には有地品之允中將が坪井航三中將と共に山口縣出身の海軍の大先輩であつた。有地中將は同戰爭後艦隊司令長官として活躍してゐたが、臺灣で英國商船臨檢事件から理不盡な抗議によつて政府が有地中將に詰腹を切らせたため、清廉潔白、有爲な名提督も失脚のやむなきに立ち至り、大いに惜まれたものであつた。この有地中將の長男は貴族院議員有地藤三郎男（豫備海軍造兵大佐）である。また同男の令弟は有地十五郎海軍中將だ。

○ 山口縣出身の名提督

山口縣からは末次大將をはじめ、日露戰爭の名將梨羽時起中將や軍略家の吉川安平中將、それに白根熊三中將をはじめ、重岡信次郎、枝原百合一兩中將や藤井謙介、阿武清などの名提督を生んで居り、海の荒鷲の親桑原虎雄少將も山口縣出身であるが、桑原少將は明治の元

勳故寺内正毅元帥の甥であつて、南方方面陸軍最高指揮官寺内壽一大將とは従兄弟の間柄である。

○ 山本（權）大將の趣味

海軍の父といはれる山本權兵衛大將は、明治三十一年から同三十九年まで、實に十年近くも海軍大臣であつた。その間北清事件や日露戦争といふ多難な時局に當面し、並々ならぬ苦勞をつゞけ國家のため、海軍のため挺身奉公の至誠を捧げたのであつた。山本大將は激務に押されて格別趣味とか嗜好といふやうなものに熱中してゐる閑暇がなく、圍碁、將棋なども手を觸れなかつた。たゞ非常にお孫さんたちを愛し、あのいかめしい山本大將が自邸にあつて、不機嫌な泣く子供さんを抱いて、一晚中みづからあやしつゞけてゐたといふ挿話もある。

○ 小閑に芝居見物

それに偶々の暇を得て芝居見物するのを楽しみにしてゐた。日露戦争の三四年前の頃、その芝居見物のときには、お氣に入りの小松刀自をわざ／＼横須賀から呼び寄せて、いつしよに下谷二長町の市村座などに出かけて行つたものだつた。格別役者の誰れ彼れを最良といふ

やうなこともなかつたが、同じ劇にしても細川の血達磨、丸橋忠彌、神明め組の喧嘩などの勇壯なものが好ましらかつた。その頃は、芝居の閉場が夜遅くなるので、不便な鐵道時代のことゝて、その夜は横濱までしか歸れない。細心親切な山本大將は、小松刀自を横濱のかねの橋と呼んでゐた今の伊勢佐木町の吉田橋まで送つて来て、そこで小蒸汽船を仕立てさせて横須賀へ送りとゞけて呉れたものだつた。

○ 横須賀軍港で觀艦式

大正二年に横須賀軍港で恒例觀艦式を舉行された。觀艦式の盛儀は、明治元年三月二十六日、明治天皇御親閲の下に、大阪天保山沖で舉行されたのが嚆矢である。そのときは參加艦船わづかに六隻にすぎなかつた。その後海軍觀艦式、大演習觀艦式、凱旋觀艦式などを神戸沖、横濱沖などで度々舉行され、參加艦船もだん／＼増加して百數十隻に上つたこともありわが日本海軍の充實進展振りを如實に現はしてゐた。しかし觀艦式の舉行場所は、殆んど横濱と神戸沖ときまつてゐたが、横須賀沖ではじめて舉行されたので、軍港市民は躍り上つて歡喜祝福したのであつた。

○ 山本首相の光榮

横須賀軍港沖で觀艦式を舉行されたときは、山本大將は總理大臣であつた。明治から大正の御代となつて、最初に舉行された海の盛典である。畏くも、大元帥陛下を軍港に奉迎し、陛下御親臨の下に舉行あそばされた海軍の譽れの盛儀。陛下に扈從し奉り、軍港の式場に臨んだ山本總理大臣の双眼には感激の涙が光つてゐた。見よ、御召艦香取のの檣頭高く金色の天皇旗燦と輝き、大御稜威の下、自分が手がけて誕生させたも同様なわが海軍の巨艦精銳が輝く軍艦旗を翻して堂々と居並ぶ盛觀。それは日清、日露の大戦をはじめ幾多の事變、事件に大捷を重ね來り、いよいよ充實生長して行くわが日本帝國海軍の姿そのものなのであつた。——山本大將はそのときの感激、喜びは多大なもので、後年になつてもよく小松刀自に向つて『あんな光榮と歡喜はなかつたよ。』と話されたものだつた。

○ 東郷さんからお土産

東郷元帥は謹嚴寡黙な聖將と仰がれてゐるが、若い時代は細つそりしたスマートな、どちらかといふと神経質な貴公子然たる士官であつた。その頃はかなり大酒家であつたが、晩年は大いに節酒され、謹嚴以て身を持したのであつて、あの重厚さは修養によつて得られたも

のと思はれる。小松刀自は明治十何年頃からのお氣に入りで、航海して軍艦から上陸して訪れるときなどは、よくお土産を持つて來て下されたと、刀自は往時を偲んでゐる。

○ 三元帥と乃木大將

明治四十三年六月、横須賀近郊の浦賀走水海岸の弟橋媛を祀る走水神社に、記念碑を建設されたとき伊東、井上、東郷の三元帥と陸軍の乃木大將、海軍の上村大將、藤井中將その他の海陸軍の將星と高崎男爵などの一行が來港して同神社に參拜し、式場に臨み記念撮影したことがあつた。まことに珍らしい顔觸れの同行であつた。弟橋媛は、日本武尊の東征に従つて、今の浦賀水道を御渡航の際、海上が大時化のため弟橋媛は日本武尊の御身代りとならせ給ひ、海中に御身を投じ給ふたお方で、その御櫛が漂著した處に走水神社を建設されたものである。前記の海陸軍の將星達は、媛の御遺烈を讃仰して參拜したもので、高崎正風男は、畏くも、明治天皇の御時代の御歌所々長であつて、記念碑建立式には祝詞を捧げたのであつた。

○ 總理や閣僚の來港

明治、大正から昭和の今日まで、觀艦式、進水式、記念艦三笠の鎮座開艦式、または軍港

見學などで幾多の顯官名士が軍港を訪れ、小松刀自の『小松』に休憩したり、祝宴に参列したりしてゐる。性來強記の小松刀自は、たいいていその時の印象などを記憶してゐるが、一々列擧に追ないほどである。首相としては、海軍の山本、加藤、齋藤、岡田の四首相はもとよりのこと、清浦、若槻、田中、林、近衛、平沼、其の他閣僚も多數に及んでゐるが、林元首相は中將時代東京灣要塞司令官として軍港にあつたので、小松に出入りの機會も多かつた。林大將は、その在港時代には、あのいかめしい風貌に似合はず、溫情な反面があつて、人情司令官として隠れた美談を残してゐる。

○ 後藤伯や芥川龍之介

帝國憲法の起草者金子堅太郎伯は、葉山に多く住んでゐた關係から屢々小松に出入の機會があつたが、金子伯は溪水と號し書道では一家をなしてをり、小松における集ひなどでよく揮毫したものだつた。また元内相の「腕の喜三郎」の鈴木喜三郎氏なども、屢々小松の客となつたが、殊に後藤新平伯は、壯年時代醫師として横須賀に居た頃から小松が大のお氣入りで、刀自の喜の字のお祝ひのときはわざ／＼やつて來て、その賀宴に臨んだほどだつた。變り種としては、異色ある作家故芥川龍之介は、海軍機關學校が横須賀にあつた頃同校の教

官をつとめてゐたことがあり、後に有名になつた文士仲間などを引き具して、よく小松にやつて來たものだつた。

○ 地震内閣

大正十二年九月二日、即ち關東大震災の起つた翌日廢墟同様となつた帝都の焦土の裡に、山本權兵衛大將を首班とする山本内閣が組織された。山本大將にとつては第二次の組閣であつて、いはゆる地震内閣と稱されるものである。閣僚には山本大將の愛婿海相財部彪大將をはじめ、内相後藤新平伯、陸相田中義一大將、法相平沼騏一郎男、遞相犬養毅、藏相井上準之助等々の豪華版であつた。この山本第二次内閣は、加藤友三郎元帥の薨去により大震災の匆忙の裡に誕生したもので、海軍部内に俊傑と謳はれた財部大將の、颯爽たる初の臺閣登場であつた。

○ 山本英輔大將の襟度

財部大將は加藤(高明)、若槻、濱口など五代の内閣に海相として仕へたが、一般海軍巨頭のたいいてい一度は歴任する横領司令長官の在任は僅か三ヶ月の短期間だつた。それに反して山本英輔大將は、横領長官を二度歴任したのであつた。その理由は山本大將が聯合艦隊司令

長官から横鎮長官に榮轉し、その任期を濟まして軍事參議官に親補されると 其の後を襲ふて横鎮長官となつたのは野村吉三郎大將なのであつた。するとあの第一次上海事件が勃發し野村大將は第三艦隊司令長官となつて上海に駆けつけたので、その後釜の横鎮長官の入選には、帶に短し襷に長しで適任者が見當らなかつたので、再び山本英輔大將をわづらはして横鎮長官に轉補となつた。兵學校で首席争ひをしたほどの秀才だつた山本大將は、頭腦緻密な智謀の名提督で軍政、軍略併せ兼ね、艦隊統御にも立派な成績を擧げたものであつた。

○ 野村大將の活躍

そうした山本大將が、後進の野村大將の後釜へ再び轉出して來るといふことは、ちよつと出來ないことなのだが、寛量恬淡な山本大將は、そんなことは少しも意に介せず、太平洋の波いよいよ高からんとする秋、聯合艦隊司令長官として大洋で鍛え上げた手腕を秘めて、ちよつと帝都關門の横須賀軍港にあつて、國防の第一線を睥睨してゐたのである。上海に行つた野村大將は、上海が特殊な國際都市であるから特に慎重を期して第三艦隊司令長官に選ばれただけに、米國のテラー提督とよく協調して、あの動亂の間に、日米の軍隊同士の間は何事も起さずに濟ましたのであつた。——このことは今から考へると特に大切なことだつた。

スチムソン政策が全日本國民の神經を昂ぶらせてゐた最中に、日、米の軍艦同士が隣り合つて碇泊してゐた上海に、よくもなんの紛争も起らなかつたものだ。萬一なにかの動機で、如何なる事態が突發するか判らない危機だつたのだ。野村大將が米國通であり、洗練された外交官タイプの武將であることは周知の通りであるが、既に第一次の上海事件當時から駐米大使の候補者に擧げられてゐたものであつた。そして野村大將は、あの上海の爆彈事件で一眼を失つて晴れの歸朝靜養後、こんどは山本大將と更代して再び横鎮司令長官となつたのであつた。——その野村大將は軍事參議官となつてから、學習院長、外務大臣と大役をつゞけさまにやつてのけ、更に衆望を擔ふて米國大使として特派され、來栖大使等と共に挺身日米國交の折衝に當つたのであるが、遂に一昨年十二月八日日米國交斷絶となり、大東亞戦争下の今日に至つてゐる。野村大使の八月二十日歸朝に當り『御無事で御目出度う御座います。ほんとに御苦勞様なこと……』と小松老刀自は野村大使に對して衷心感謝の言葉を捧げてゐた。

○

海軍おばあさん小松刀自の思ひ出は、アメリカのペルリ來航からはじまつて、野村大使の歸

朝に及んでゐる。これは恰もわが日本と米國との宿縁の一断面であり、海軍發達進展の過程と一脈の深い繋りのあるのは興味深いことである。

女傑と長壽

『海軍おばさん』山本小松刀自は、多くの海軍將士から『小松の姉御』の昔から『小松のおばあさん』と慕はれ、愛され、本年九十五歳の高齡を重ね、なほ文字通り矍鑠たる日常生活をつとけてゐる。

女傑といはれるほどの人は、殆んど例外なしに長壽のやうである。時節柄思ひに浮ぶナイチンゲールとか、パトロンなどの女性も、九十歳以上の長壽であつた。わが日本の明治、大正、

昭和の三代を通じて見ても、矢島楫子、奥村五百枝、津田梅子、三輪田眞佐子、瓜生岩子、下田歌子、棚橋絢子などいふやうな女性も、みな長壽で、中には九十歳から百歳以上の高齡を重ねた人もあり、いづれも女傑といはれたほどの人である。

長壽といふと、直ぐに健康といふことが考へられる。右に挙げた女性にしる、小松刀自にしる、いづれも珍しい健康人だつたことには相違ないであらう。華奢な、繊細な身でありながらも、幸ひに長壽に恵まれたために後世に傳へられる仕事をなし得たといふのでなく、若いときから一日、一日が、一年、一年が、太くたくましく生活されてゐたやうである。

小松刀自は、前に述べたやうに、女性にしては珍しい大柄な體軀であつた。しかし若い時代は、一見して楚々たる麗人型であつたといはれてゐる。意地と張りで通して來た俠骨な女性ではあるが、平常の舉措は、優美な華奢な女性であつたのだ。

容貌は優美で、なで肩、細腰、手足の舉措も華奢な麗人ながら、どうかしてふとした拍子に袖口の奥のあたりからチラと見える二の腕などが、意外に隆々とたくましく張り切つてゐる——かういふ女性で長壽をたもち、女傑といはれるやうな人がある。小松刀自も、さういふ女性であるのだ。

張合のある生活

わが日本海軍の創始のころから、殆んど一世紀にわたつて、時世の變遷をその眼で見、その耳で聴き、更に今や世界に冠絶する、日本帝國海軍の成長した姿を仰いでゐる小松刀自の存在は、たしかに一つの驚異である。

その小松刀自に向つて『健康法』とか『長壽の信條』といふやうなことを質問しても、型にはまつた個條書きのやうなことは、決して言はないのである。たゞ一つ、

『わたしは、子供のころからあこがれてゐた日本帝國海軍が、今日のやうに、世界一の強い海軍になつたまで生きてをられることを、海軍のみなさまに感謝するばかりで御座います。わたしのこれまでの半生は、海軍のお蔭で、張り合ひのある生活で御座いました。』と率直に言ふのみである。

そして、幾多の戦争に、事變に、また平時にも、皇國のため身命を捧げた海軍將士の英靈の冥福を祈り、皇軍の武運長久を祈りつゝ、心靜かにも強く、その一日一日を感謝して生活してゐるのである。(終)

昭和十八年四月一日初版印刷
昭和十八年四月五月初版發行

(三、〇〇〇部)

海軍夜話

◎定價一圓八十錢

(認承協文出)
7360018號



著者

久住幸作

發行者

横須賀市中里町二二八
出口良雄

印刷者

東京市神田區錦町三ノ二六
正木忠義

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所

横須賀市中里町二二八
海國社

東京事務所

電話 横須賀一六五四番
振替 東京六九〇九二番
會員番 一〇六一三五番
神田 神保町一ノ六九





